京都府埋蔵文化財情報

第 3 号

篠・西長尾5・6号窯発掘調査概要……石井清司…… 1
大内城跡発掘調査概要……伊野近富…… 8
青野・綾中地区遺跡群の調査……中村孝行……18
丹波国分寺……樋口隆久……25
「銅出徐州」の銅（その1）……福山敏男……35
—昭和56年度発掘調査略報—……39

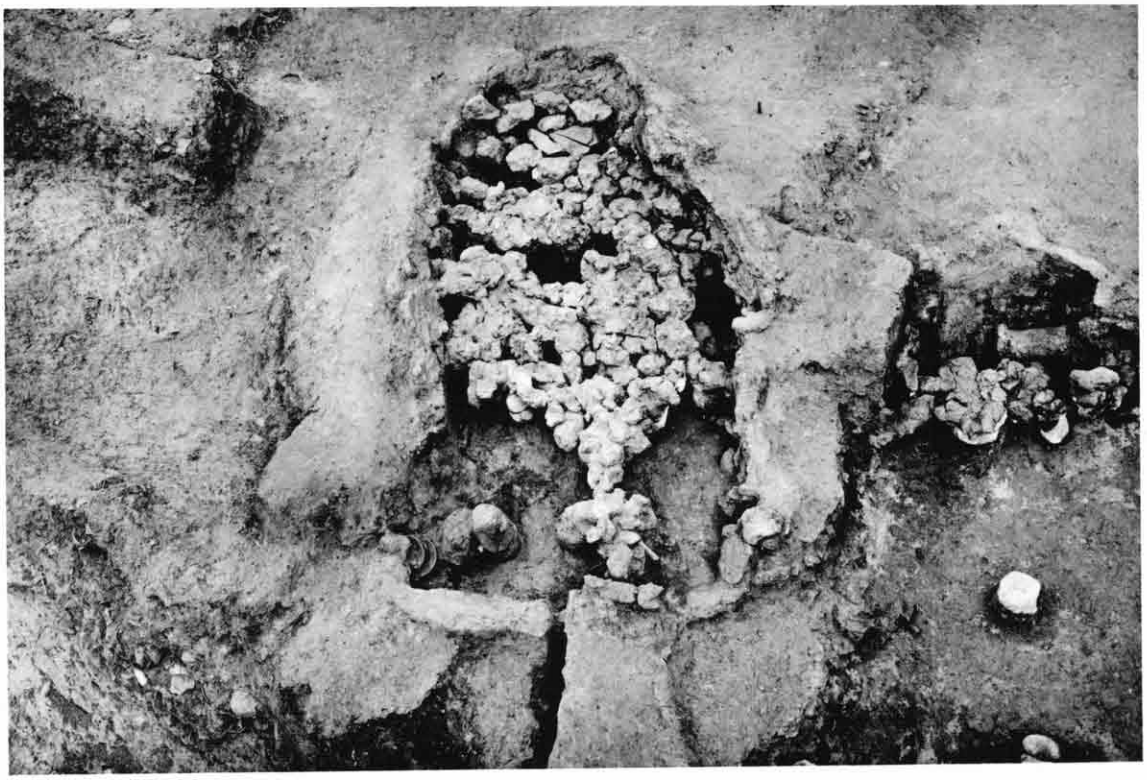
6. 橋爪遺跡
7. 中尾古墳
8. 下畑遺跡
9. 稚児野遺跡
10. 園部城跡
11. 長岡京跡右京第85次
12. 平安宮跡式部省推定地
13. 平安京跡左京北辺二坊
14. 黄金塚2号墳
15. 羽戸山遺跡
16. 内田山古墳

府下遺跡紹介 4. 恵解山古墳 5. 扇谷遺跡……59
教育委員会だより……65
センターの動向……69
受贈図書一覧……71

1982年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

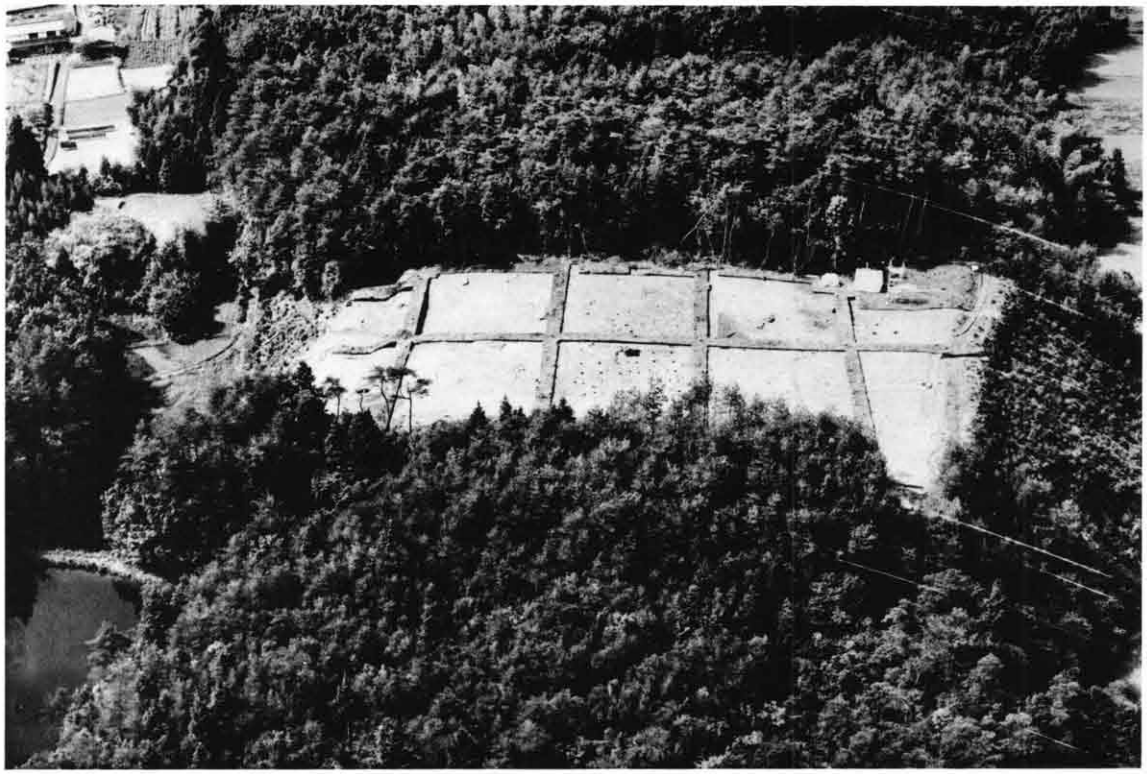
図版第1　篠・西長尾窯跡



(1)　西長尾5号窯（西から）

(2)　西長尾6号窯（東から）

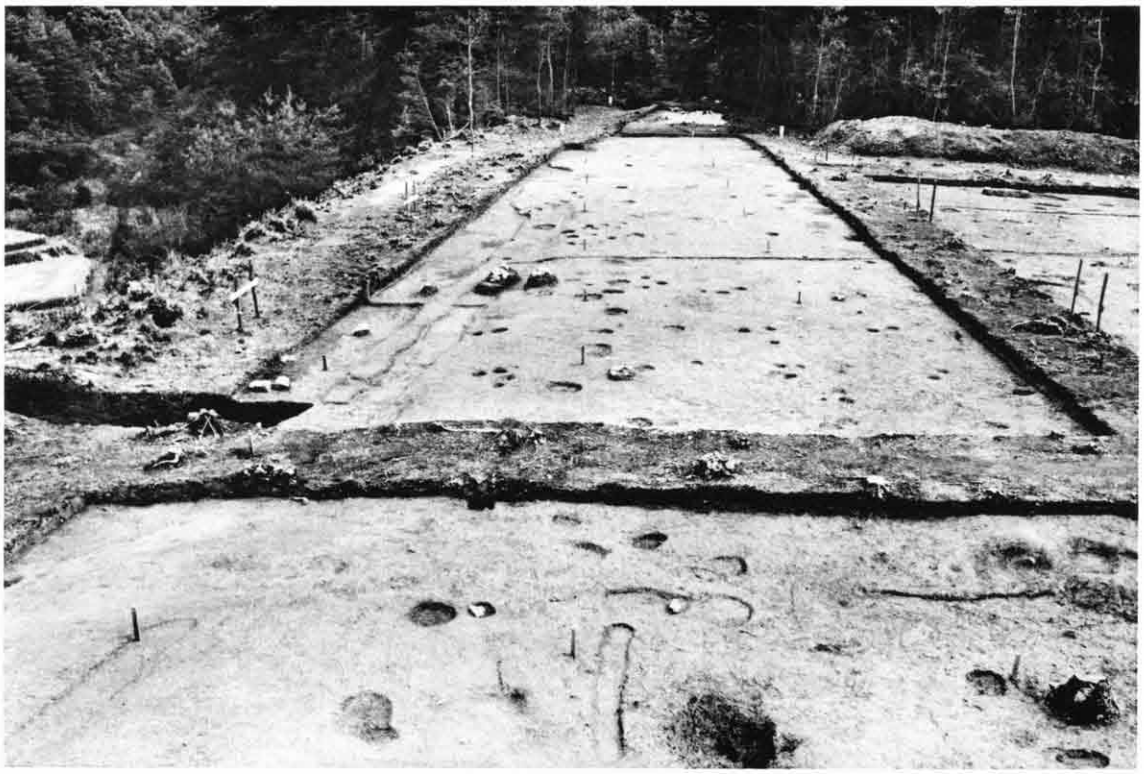
図版第2　大内城跡



(1)　大内城跡全景（東から）

(2)　腰曲輪（東から）

図版第3　大内城跡

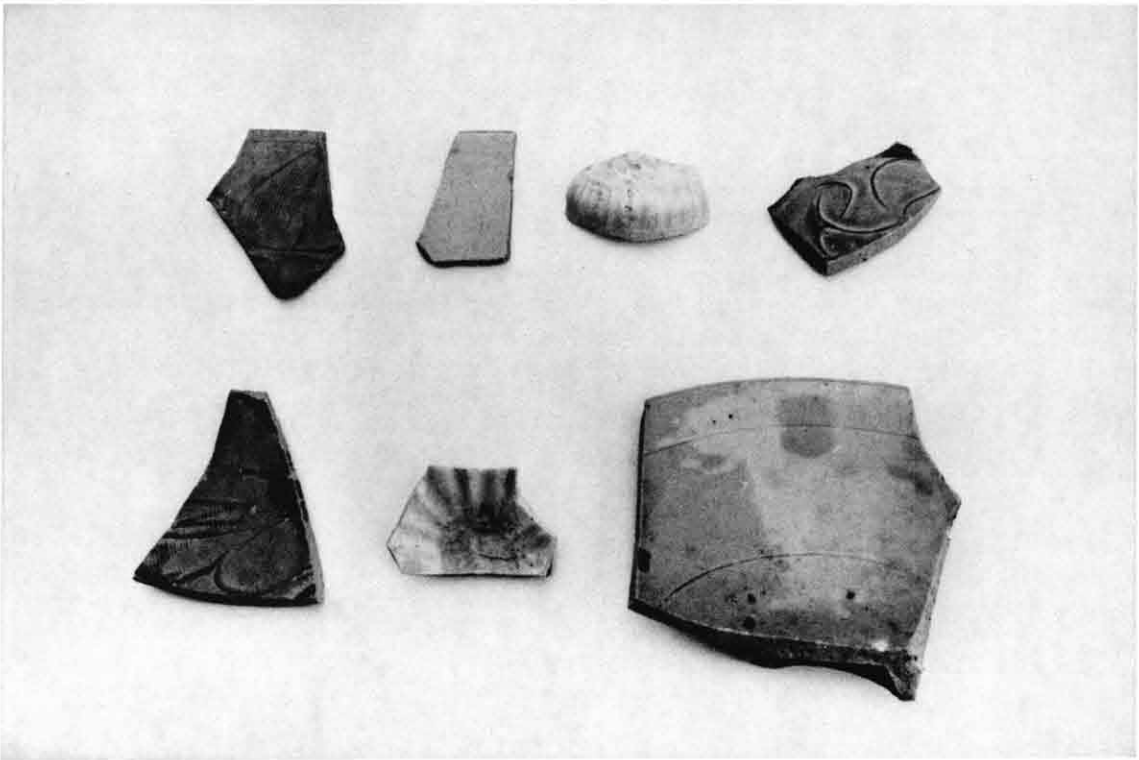


(1) 土塁・空堀・建物6（西から）

(2) 溝1・建物3（北から）

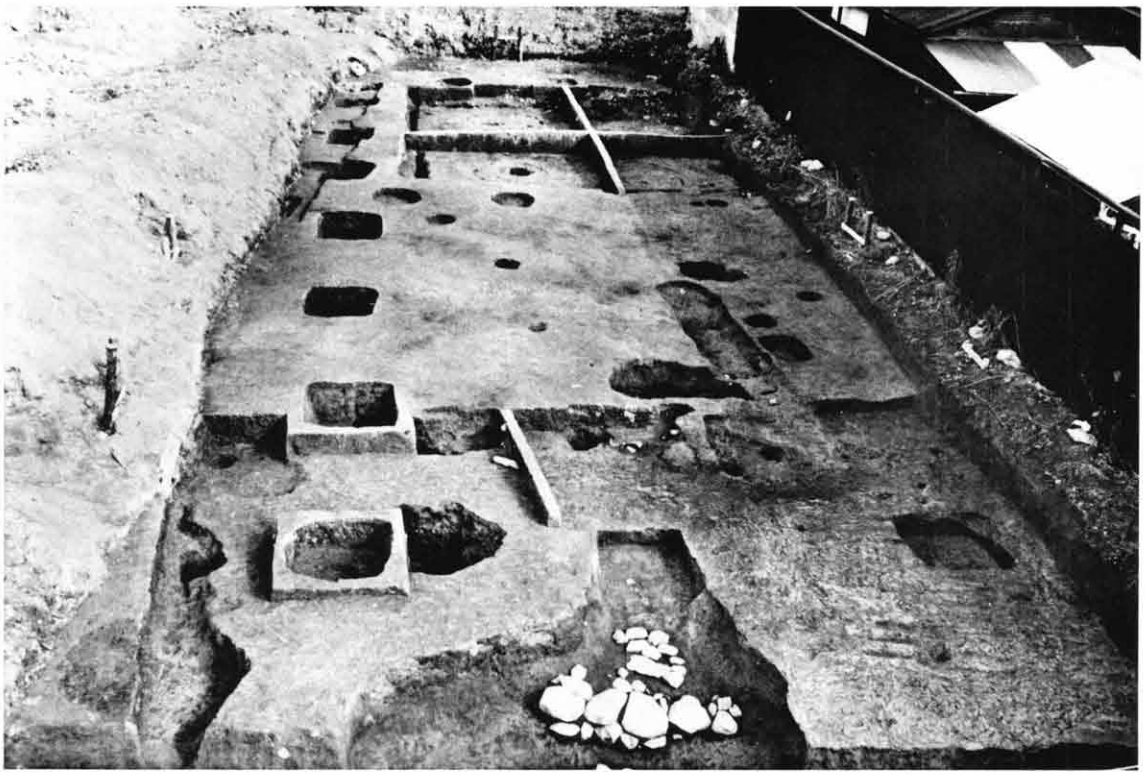
図版第4　大内城跡

(1)　土壙1、遺物出土状況（西から）

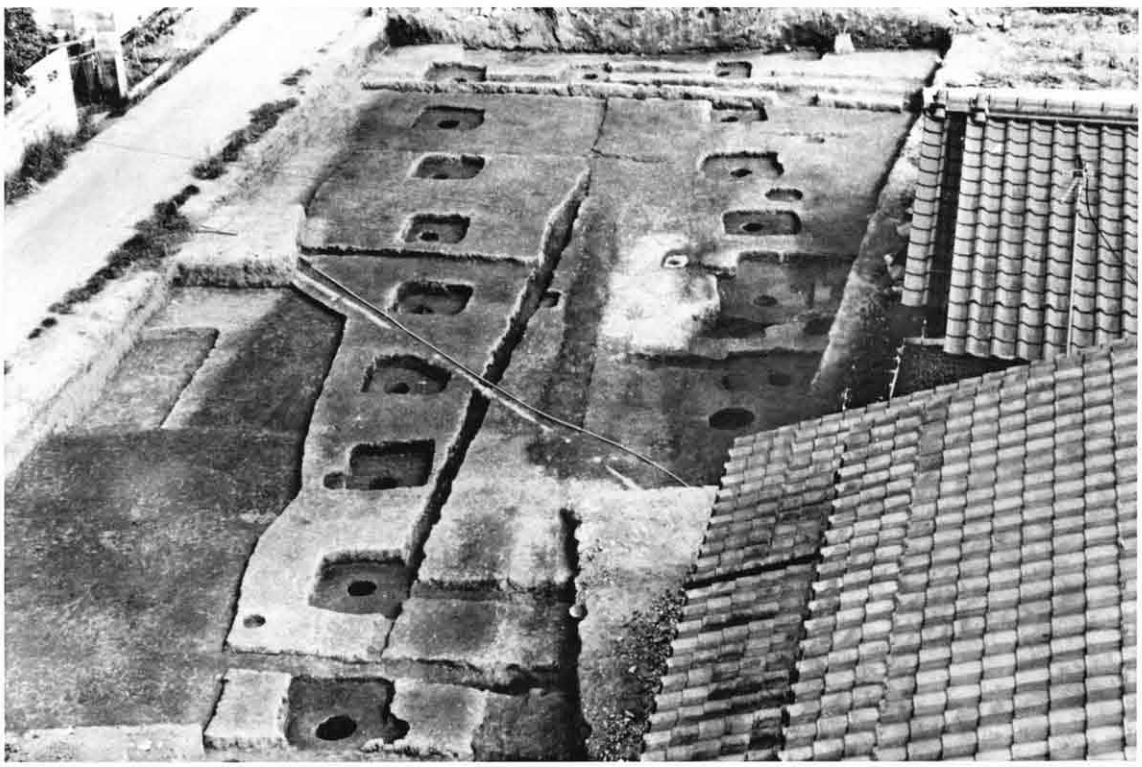


(2)　中国製青磁・白磁類

図版第5　青野南遺跡



(1)　ＳＡ8102ほか（西から）



(2)　ＳＢ8108（西から）

図版第6　丹波国分寺

(1) 丹波国分寺、本尊薬師如来坐像（重要文化財）

(2) 丹波国分寺、塔跡礎石

図版第7　恵解山古墳

図版第8　扇谷遺跡

（資料提供＝読売新聞社）

篠・西長尾5・6号窯発掘調査概要〈図版1〉

石　井　清　司

1. はじめに

亀岡市篠町小字西長尾に所在する篠・西長尾窯跡の発掘調査は昭和56年6月4日より始まり，51年度の試掘調査で確認された1・3・4号窯の各窯跡の調査を9月末日終了した。

10月より2号窯の窯体及び灰原の範囲確認のため，23～25M・Nを拡張した際，新たに窯壁の一部と思われる焼土を確認し，急拠，調査地区を拡張し，窯の有無について検討するため調査を継続した。その結果，2基の窯（西長尾5・6号窯）を検出した。

5号窯は平面砲弾形で焼成部はロストル（火格子）型式の二重床面という特異な窯体構造であり，6号窯は平面三角形の平窯である。

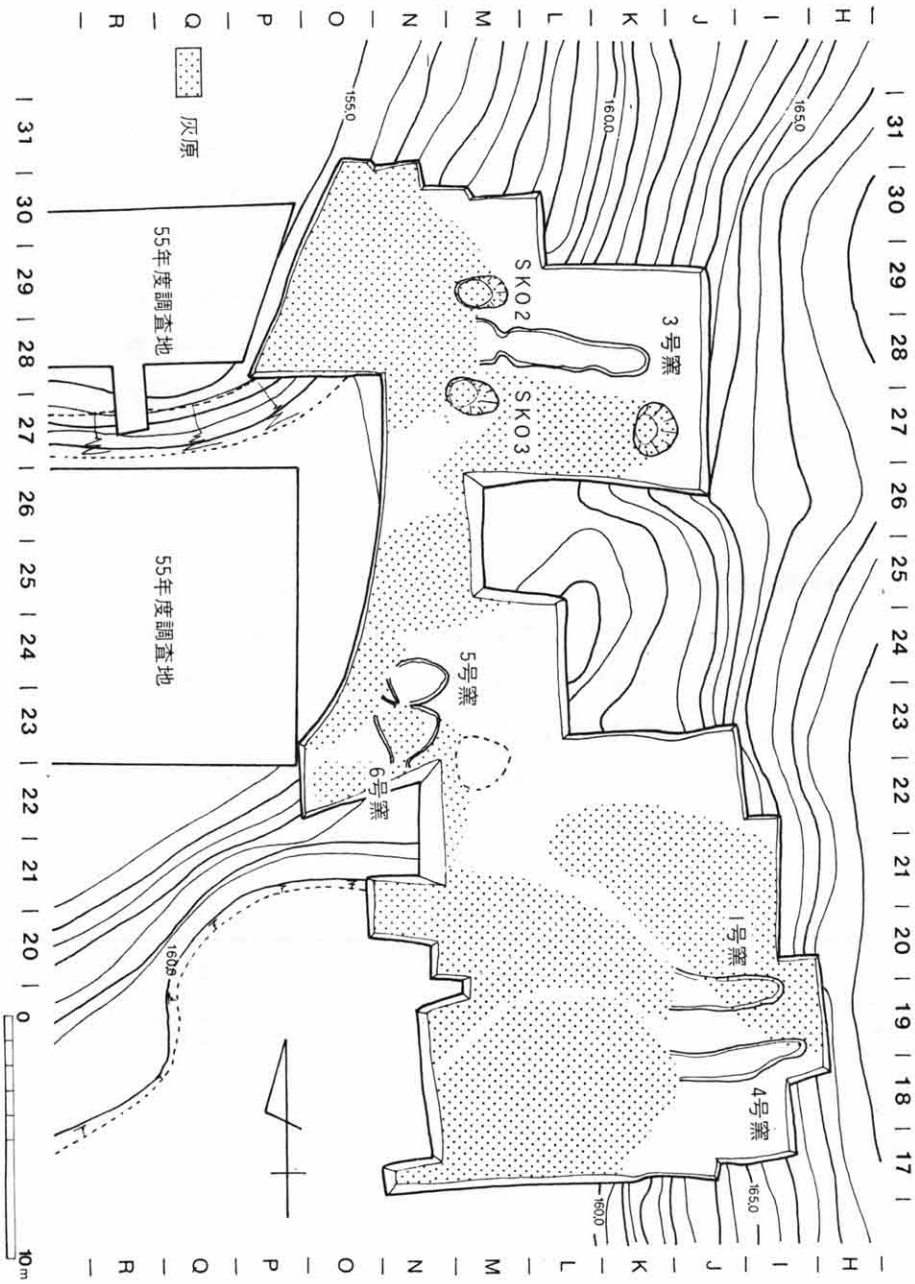
2. 各窯跡の概要

西長尾1・3・4号窯は南北にのびる丘陵の西側斜面（傾斜角30°～40°）に構築された半地下式登窯であり，5・6号窯は，1・3号窯の中間に位置し，丘陵平坦面より斜面に移行する傾斜変換部に構築された平窯である。

なお，1～4号窯は『京都府埋蔵文化財情報第2号』で記載したため，今回は重複を避け，新たに検出された5・6号窯について記す。

西　長　尾　窯　跡　一　覧　表

	窯体構造	主軸方位	総長(m)	最大幅(m)	床面傾斜角	出土遺物	備考
1号窯	半地下式登窯	N87°W	5.30	1.35	28°	杯・皿・蓋・瓶子・平瓶・円面硯	
2号窯	不明	—	—	—	—	埦・鉢・瓶子	
3号窯	半地下式登窯	N81°W	8.44	1.55	29°	埦・鉢・瓶子	
4号窯	半地下式登窯	N82°W	5.79	1.08	30°	杯・皿・蓋・瓶子・平瓶	
5号窯	楕円形平窯	N75°E	2.25	1.35	上 8°30′ 下 10°20′	埦・鉢・瓶子	焚口が2方向ある。
6号窯	三角形平窯	N77°E	2.44	2.44	8°	埦	焚口が2方向ある。



第1図　篠・西長尾窯跡遺構配置図

第2図 西 長 尾 5 号 窯 平 面 図

5号窯

5号窯は平面砲弾形を呈し，長軸2.25m，短軸1.35m，主軸方位 S74°E を測る倒焔式平窯である。天井部は削平を受け，側壁は床面より30～40cm遺存する。焼成部床面は二重構造を呈し，ロストル（火格子）型式による特異な窯体構造をなす。なお，説明上，底部床面を第1次床面，支柱上面に敷かれた床面を第2次床面と仮称する。床面傾斜角は第1次床面10°30′。第2次床面8°30′を測る。

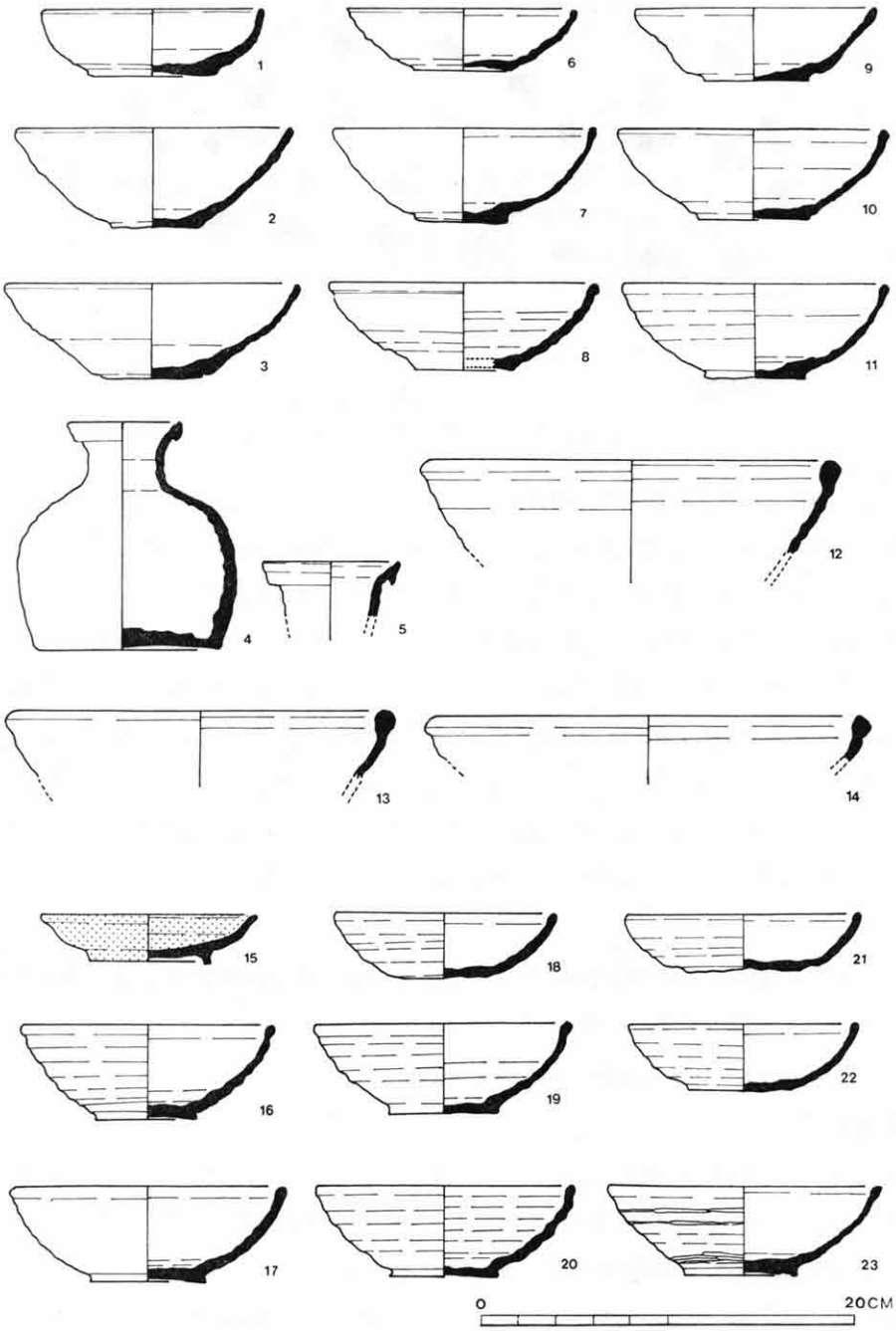
第3図　篠・西長尾5号窯支柱遺存状態（西より）

燃焼部は長さ45cmを測り，燃焼部と焼成部の境に40cmの間隔をおいて，直径約10cm，高さ30cmの円柱を立て，焼成部内の燃焼効率を良くするため，側壁と円柱の間に，さらに円柱を架け，側壁を内側にしぼり込む。燃焼部中央には窯壁に平行して南北に並ぶように30cmの間隔をおいて円柱が立ち，分焔柱の役割をなす。燃焼部床面には薄く灰層が堆積する。焚口部は南・北の2か所があり，焚口部幅約58cmを測る。

焼成部は長さ約1.5m，最大幅1.35mを測り，燃焼部の境と同様，煙道部の境にも，両側壁を内側にしぼり，また煙道部床面とは段差をもつ。焼成部は第1次床面より直径10～15cmの円柱を17本立て，その上面に拳大の粘土塊をわずかに隙間をあけ，不規則に敷く（第2次床面）。また一部，支柱間に円柱を架け，粘土塊が崩落しないように補強する。第1次床面より立てた支柱は燃焼部近くでは中心より30cmの等間隔をおいて並び，煙道部に向かうにしたがい，支柱間は15cmと狭くなる。また支柱は窯体主軸の4個を中心に放物線状に配する。第2次床面である粘土塊直上には土器底部片が密着し，さらに土器直上に一部粘土塊を裾えることより，第2次床面は二回以上の補修作業が考えられる。

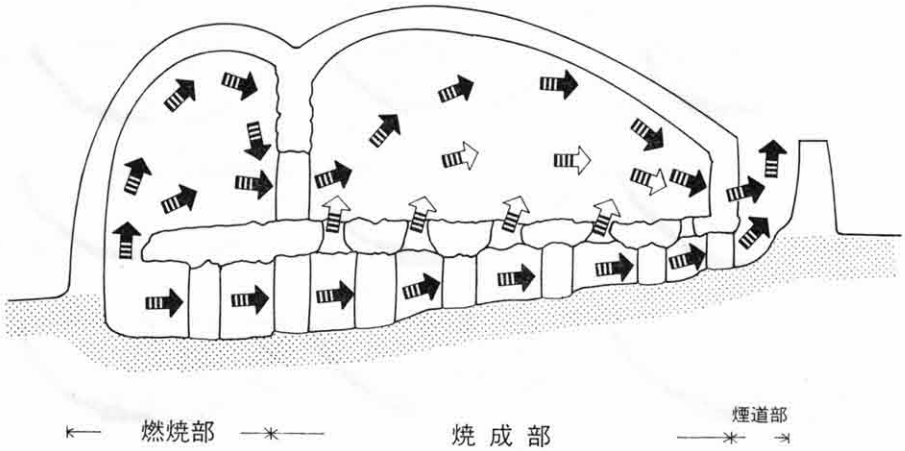
煙道部は長さ30cmを測り，煙道部床面に円柱が転落した状態で出土する。また床面に15cm大の角礫が表面焼けた状態で4点出土し，火を焼成部にとどめるための火だての役割をしたと思われる。

窯体両側壁は還元焔焼成により堅く焼かれており，後述する6号窯窯壁と比較すると5号窯の焼成温度が高く，燃焼効率の良さが窺える。



第4図 西長尾5号窯出土遺物

窯体内；1～14，灰原内；15～23，須恵器椀A_{Ia}；18・21・22，A_{Ib}；1・6・9，A_{II}；2・3・7・8・10・11・16・17・19・20・23，瓶子；4・5，鉢；12～14，緑釉陶器皿；15



第5図　西長尾5号窯想定図

5号窯の出土遺物は窯体内より椀21，瓶子2，鉢3を数えるほか大部分は窯体北側灰原に集中する。灰原内出土遺物は椀，鉢，瓶子があり，出土総数約2400個体を数える。

椀はA・Bの二種に大別でき，椀Aは法量により A_{I}・A_{II} に別れる。

椀A_{I}は口径平均12.4cm，器高平均3.3cmを測り，粘土塊よりロクロ水挽き成形したもので，底部をヘラ切りしたもの（A_{IIa}）と回転糸切りしたもの（A_{IIb}）がある。椀A_{II}は口径14.6cm，器高平均4.7cmを測り，底部はいずれも回転糸切りによる。椀Bは椀Aと同じく，粘土塊よりロクロ水挽き成形ののち，底部をさらに削り出し高台に成形し，外面及び上部の一部にヘラミガキを加える。鉢は口縁部を玉縁状に内・外面を肥厚させ，底部はいずれも回転糸切りによる。瓶子は器高と胴部最大径が等しく偏平を呈し，底部は回転糸切りである。

5号窯出土遺物の器種別内訳は椀A_{I} 19.8%，椀A_{II} 58.95%，椀B3.3%，鉢18.23%，瓶子6.5%，その他0.07%と，椀A_{II}が主体をしめる。

なお，灰原内より緑釉陶器皿が1点出土した。

6号窯

6号窯は5号窯の南に隣接し，平面三角形を呈する平窯である。煙道部頂点より焚口部を2等分する点を主軸とすれば主軸長2.4 m，主軸方位 S77°E を測る。天井部は5号窯と同じく削平を受け，両側壁は床面より約40cm遺存する。

燃焼部と焼成部の境は不明瞭であるが，両焚口部より半径40cmの円弧を描いて床面に凹みが検出でき，同凹み内より焼土を含むことより，これを燃焼部と考える。焚口部は南・北の2か所があり，南焚口部は天井部のアーチがそのまま崩壊した状態で検出された。

焼成部と煙道部の境には5号窯と同じく支柱が立ち，さらに拳大の粘土塊を敷いた痕跡

があり，焼成部には4か所円柱が立った状態で検出され，二重床面の可能性がある。煙道部床面には直径約10cm，長さ約30cmの円柱が横転した状態で検出された。煙道部側壁は床面より垂直に立ちあがる。

6号窯は5号窯構築に際し，削平を受け，6号窯窯体内には，5号窯灰原が堆積する。

3. ま と め

ここで今回の調査結果をまとめると，西長尾5号窯は篠窯跡群のこれまでの発掘調査例では類例をみないロストル型式による二重床面の窯であり，6号窯は平面三角形を呈するいわゆる「三角窯」である。

5・6号窯の先後関係は6号窯の操業が終了したのち，近接した時期に6号窯を削平し新たに北側に隣接して5号窯を構築する。

「三角窯」は篠窯跡群の発掘調査では黒岩1号窯，前山2・3号窯，小柳4号窯に続き5例目である。6号窯の焼成部には円柱が立ち，また煙道部との境に支柱を立て，その上面に拳大の粘土塊を敷き，5号窯にみられる二重床面の可能性がある。これは焼成部床面に直径8～20cm，深さ2～3cmの不整形のピットを穿ち，同ピット内に拳大の粘土塊も裾え，その粘土塊を焼き台として土器を焼成する黒岩1号窯，前山2・3号窯とは窯体構造を異にする。また，黒岩1号窯，前山2・3号窯では須恵器椀・皿・鉢などに混り，出土総数の約10%は緑釉陶器を含み，「三角窯」を緑釉陶器を生産するための二次焼成窯と考えられていたが，昭和55年度調査された小柳4号窯とともに6号窯でも緑釉陶器を含まず，今後「三角窯」について検討する必要がある。

西長尾5号窯はロストル型式による二重床面という特異な窯体構造である。ロストル型式の窯は瓦生産の窯では知られているが，須恵器生産の窯としては初見である。5号窯の窯体構造は燃焼部からの火が焼成部第1次床面の支柱の間を這い，第二次床面である粘土塊の隙間を通り，焼成部全面に広がり煙道部から抜けるように考えられており，床面の傾斜・支柱の配置，火だての施設などに工夫をこらしている。推論を許されるなら，6号窯は二重床面と考えられ，6号窯を改良した形が5号窯と考えられる。5号窯出土遺物は，椀A_{Ia}・A_{Ib}・A_{II}・B・鉢・瓶子があり，椀A_{II}が59.5%と主体をしめ，11世紀前半と考えられる。

（石井清司＝当センター調査課調査員）

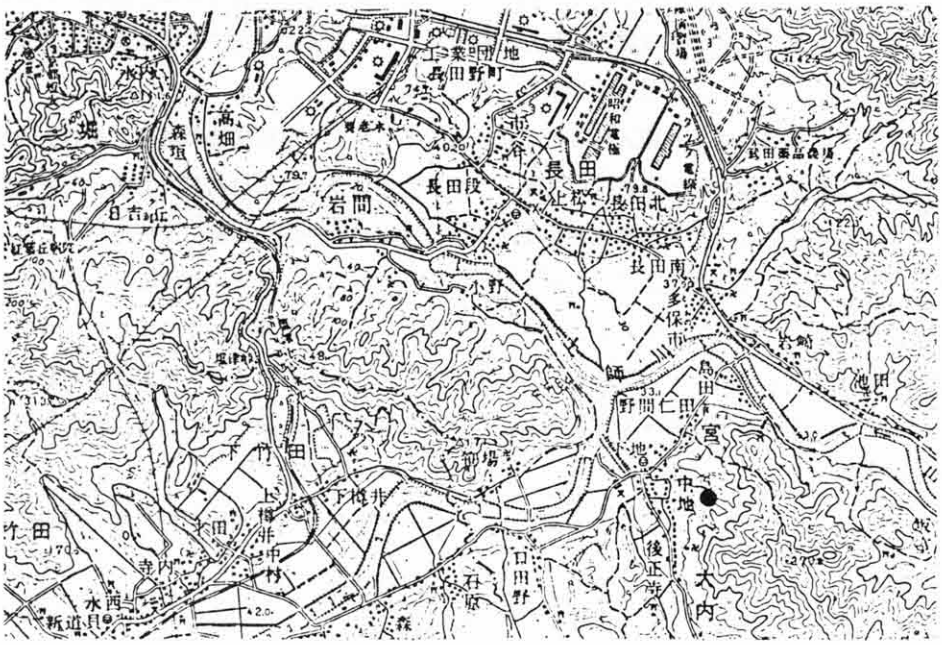
大内城跡発掘調査概要〈図版2～4〉

伊　野　近　富

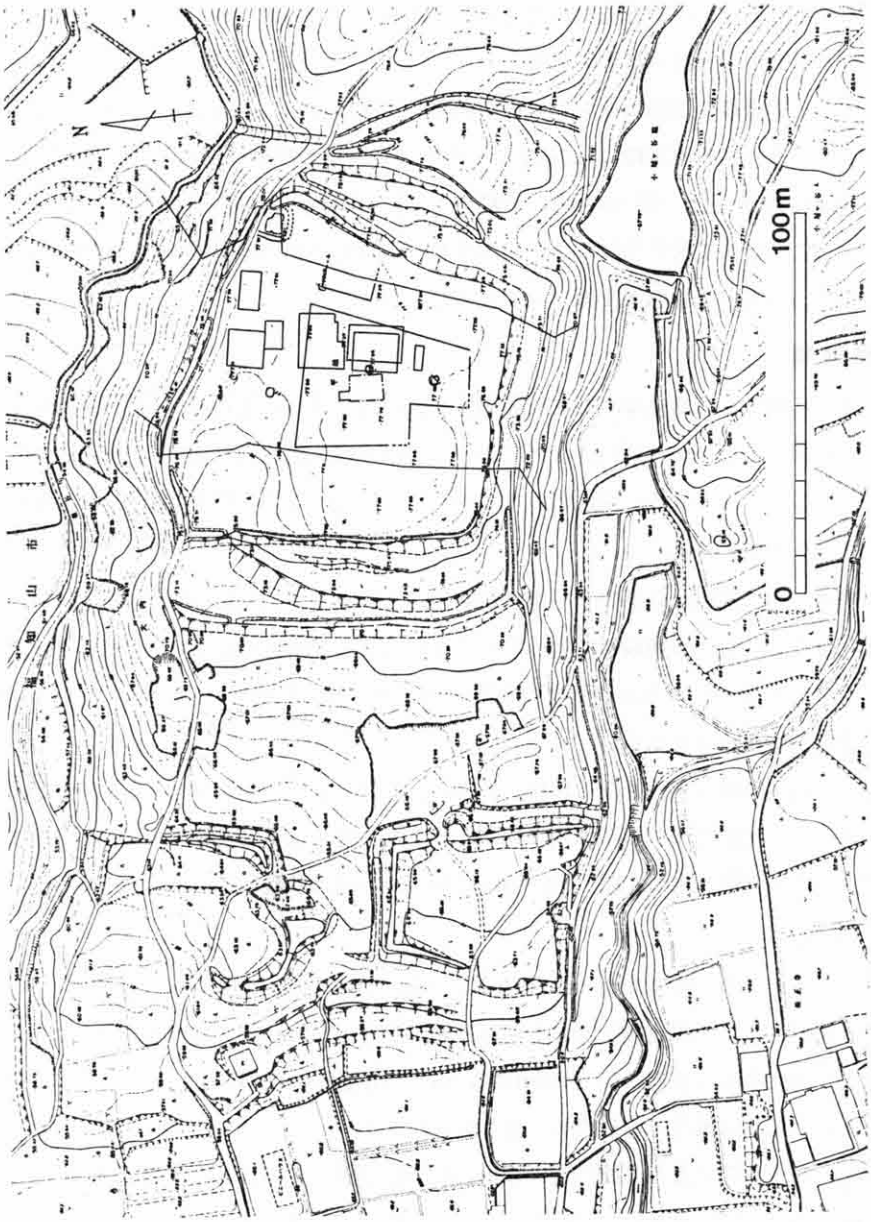
1. はじめに

大内城跡（平城跡）は，福知山市の東南部に位置し，兵庫県境まで歩いて30分のところにある。行政区画としては福知山市大字大内小字平城に相当する。遺跡は，標高50～70mの丘陵にあり，土塁や空堀を現在でも目に止めることができるほど遺存状況が良い。今般標高70m代のところに近畿自動車道舞鶴線の路線計画がなされたことから，遺跡の性格を把握し今後の措置の検討資料作成のために発掘調査を実施することとなった。

調査地北端から平野を眺望すると，二河川の合流する様が見える。左側が兵庫県から流れてきた竹田川で，右側が国道9号線沿いに流れてきた土師川である。ここで由良川に統一され，舞鶴市で日本海に注ぐ。この合流地点の向こう側に長田野台地が長く横たわっている。新生代第4紀更新世に堆積した層である。なお調査地周辺には段丘面が認められるが今は浸蝕され小さな谷が幾つも形成されている。調査は昭和56年5月14日から開始し，昭和57年3月に終了する予定である。対象面積は約5200㎡である。



第1図　調　査　地　位　置　図



第2図 大内城跡周辺図

2. 調査概要

調査地（道路予定敷）は，土塁などで縄張りされた北辺100m，南辺70mの台形区画（郭）のほぼ中央部を横断（幅40～45m）する形となっている。発掘調査前の観察によれば土塁や空堀がめぐり，帯ぐるわなども良好に認められる中世の平山城と考えられていた。なお谷の水田面との比高差は約20mである。

調査は，まず全域を道路のセンター杭を利用して4m方眼の地区を設定することから始めた。そしてこれを基準に幅1.5mのトレンチを設け層序の把握に努めた。その結果，腐蝕土（数cm），黄褐色土（20～30cm），暗褐色土（0～20cm），赤褐色土（地山）の土層が確認できた。この段階で溝や柱穴などが検出され，暗褐色土からは多量の陶磁器類が出土した。このため調査地全域を順次調べることとなった。

検出遺構

現在までに検出した遺構は，掘立柱建物跡9棟，井戸2基，集石遺構3か所，溝，土塁，空堀，墓2基，土壙，柵3条以上などである。これらは黄褐色の整地層によって大きく2時期に分けることができる。整地層の下から検出された一群を「第1期」とし，整地後の一群を「第2期」と呼ぶ。

第1期は，出土遺物から平安末～鎌倉初期と考えられる。丘陵の両端から土塁と空堀が発見されたことから，地表観察で認められる土塁による台形区画がこの段階から意識されていたことが知られる。なお建物群は台形区画の東半分に集中している（第2図）。以下は主要遺構の概要説明である。

建物1　南北5間×東西4間（12m×9.6m）。柱間は8尺等間。柱穴は一辺約30cmの方形掘形をもち，現精査面から30cmの深さがある。なお底には平石を据えている。総柱建物。

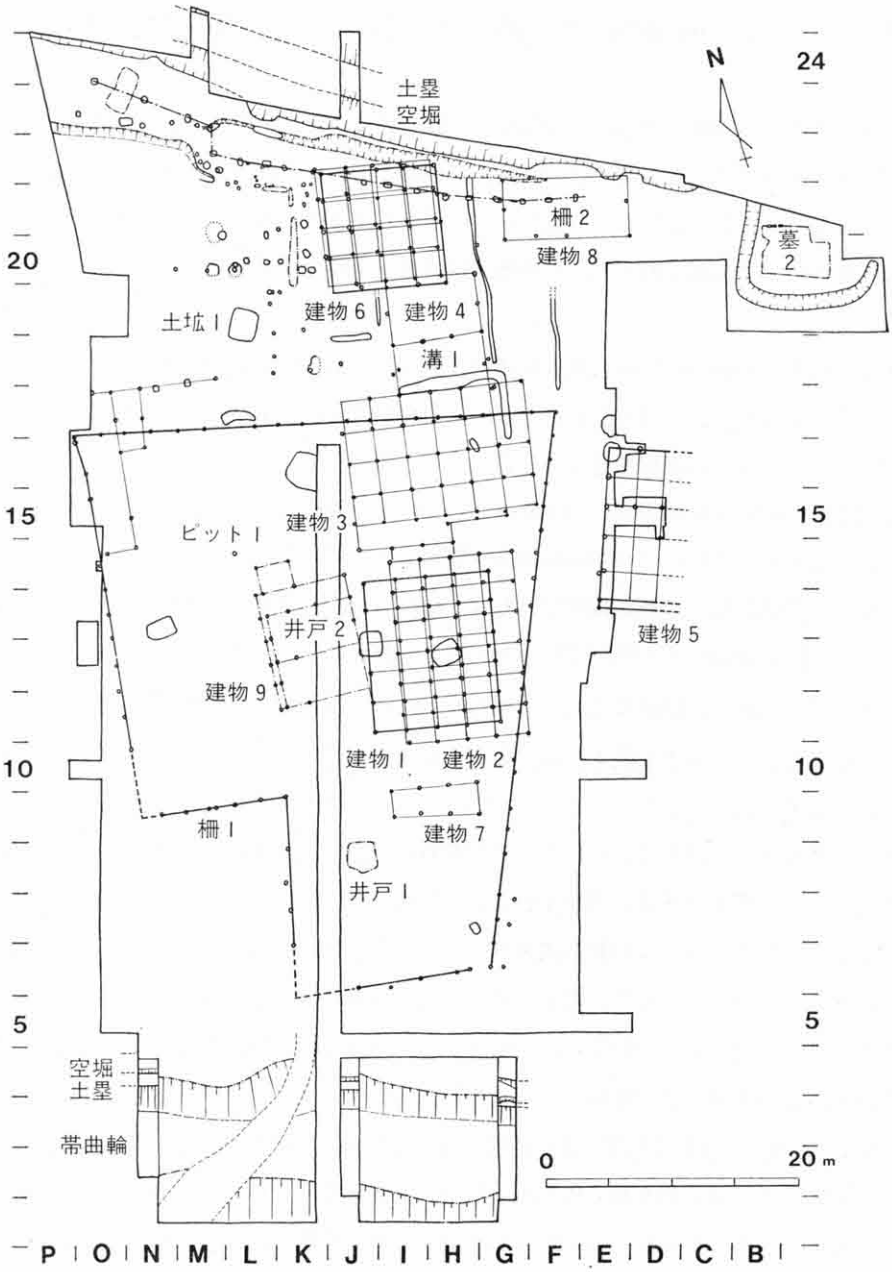
建物2　南北6間×東西4間（14.4m×9.6m）。柱間は8尺等間。柱穴は径30cm程度で円形。総柱建物。

建物3　南北4間×東西6間（9.6m×14.4m）。柱間は8尺等間。南側には7尺と2尺の張り出し部が付く。一部建物2と廊下様施設により連結していた可能性がある。総柱建物。

建物4　南北2間×東西3間（4.8m×7.2m）。南側は建物3と連結していた可能性がある。また，北側は後述する建物6と接していたらしい。

建物5　南北5間×東西2間以上（12m×4.5m以上）。柱間は8尺等間。（なお東西は西が7尺，東が8尺）南側に2尺の張り出し部（廂）が付く。総柱建物。

建物6　南北4間×東西4間（9.2m×9.2m）。柱間は8尺等間。総柱建物。若干北にずらせて建て替えている。古い方をA，新しい方をBと呼称する。先述した建物4とBとは一部の柱を共有しており，同時期と考えられる。



第3図 主 要 遺 構 平 面 図（略測）

太線；第1期古段階，細線；第1期新段階
一点鎖線；第2期（建物・柵・腰曲輪・墓のみ）

建物7　南北1間×東西3間（2.1～2.4m×2.4m）。柱間は7～8尺。

建物8　南北2間×東西4間（4.8m×9.8m）。柱間は8尺等間。

井戸2　一辺約2mの方形。深さ1.8m以上。木枠があったと考えられるが遺存していない。

溝1　幅0.6～0.9m。現存の深さ0.3m。「L」字状に屈折。建物3の雨落ち溝か。そうだとすれば屈折した部分が建物の下に隠れていたことになり，雨落ち溝としての機能が十分果たせなかったこととなる。したがって，雨落ち溝と考えるならば，本来東西5間であった段階に造られた溝であって，その後建物は東へ1間分建て増しされたと考えるのが妥当である。

柵1　建物1を台形状に囲む北辺約38m，東辺約44mの柵。柱間は6～9尺で7尺がもっとも多い。なお，入り口と思われる箇所が南東隅にある。また，地形的には北西隅が低くなっており，ここに通路を想定することもできる。

土壙1　一辺約2mの方形。深さ30cm。底面に完形の瓦器椀や皿，土師器皿などを整然と円弧状に並べており，その中心には瓦器盤が置かれていた。

土塁　調査地北側での断面観察によれば，幅約2m，高さは第2期の土塁で削平され不明。空堀掘削の際の排土を外側に盛ったと考えられるので往時は数十cmはあったらしい。

空堀　同上での断面観察によれば，幅約3m，深さ0.5m。下層に炭や遺物を包含する。

以上のように，整然と配置された遺構群を確認することができたが，これらは新旧の2段階に分けることができる。つまり，古段階として建物1，建物5，建物6A，柵1。新段階として建物2，建物3，建物4，建物6B，建物7，溝1，井戸2である。直接的な根拠としては，柵1→溝1，建物1→井戸2の切り合い関係がある。この事実により柵1→建物3，建物1→建物2の新旧関係もわかる。また建物の構造上のつながりで建物1＝建物4・建物6Bと考えられ，柵1の東辺と方向を合わせた建物5が古段階である可能性を指摘できる。建物7については，他の建物との関係では新段階が妥当だが，柵1の南部の張り出しに注意すれば古段階とも考えられる。

なお，調査地の南西部及び土壙1付近には暗褐色の遺物包含層が0.3～0.5mの厚さで堆積している。これは窪地を平らに整地した際の土層と考えられる。この整地層の上から土壙1が掘り込まれているが，これには新段階の土器が整然と据えられていた。意図的な埋納状況を平安時代の文献にみられるような建て替え時の祭りの痕跡と考えれば，新段階に地鎮祭が行われたとも解釈し得る。

第2期は，出土遺物から南北朝～室町末期と考えられる。全体を黄褐色で盛土し，その際，浅い窪地となっていた第1期の空堀を埋めたて土塁部分は更に数十cm高く盛って整形

したことが認められる。

建物９　南北４間×東西３間（7.2m×6.8m）。柱間は約６尺。西側に２尺の廂，北側に６尺の廂が付く。更に７尺の廊が北廂に付く（中門廊）。柱穴からの出土遺物から南北朝頃と考えられる。なお，柱穴は黄褐色土の整地層に切られており，整地直前に営まれた建物であるので，あるいは第１期遺構とするべきかも知れない。しかし，建物構造，規則性ともそれとは脈絡がなく，従って第２期に入れた。

井戸１　一辺約2.4mの方形。深さ0.6m。水漏れ防止のため底面には粘土を貼りつける。天水を溜るためのものか。

土塁　調査地北側で現存高0.4m。幅2.6m。崖下3.5mまで人為的に整形し，その傾斜角は約42度である。

出土遺物

整理箱で約200箱出土した。この内第１期のものが80%以上を占める。

第１期に伴うものは，瓦器椀・皿・盤，土師器皿（高台つきあり），中国製白磁椀・皿，青磁椀・皿，青白磁合子・小壺，東播系須恵器ねり鉢・甕，在地系須恵器ねり鉢，常滑系甕，滑石製鍋などである。

以下図示した遺物について説明する。１～４はピット１から出土した土師器皿である。ピット１は14L区にあり直径30cm，深さ10cmを測る。この中に小皿４枚，中皿６枚が埋納されていた。平均口径は小皿8.8cm，中皿14.8cm。中皿の外形は口縁部を上下二段に亘ってヨコナデしたもの４，一段ナデのもの２が認められた。色調は淡褐色系である。在地土器と考えられる。この土器を平安京での編年資料と対比すると，平安京左京内膳町ＳＥ288上層出土資料[注1]に類例が求められる。そこでは二段ナデと一段ナデの手法が混在し，平均口径は小皿９cm，中皿14.5cmである。一応12世紀中葉～後葉に比定されている。

５～７は建物の柱穴から出土した。完形に近いものが多く，柱を抜き取った際に意図的に埋納したらしい。土師器皿の中には少量ではあるが高台をもつものがある。但し高台の有無で形態的に違うわけではない。５は口径9.1cm・器高２cmである。６は口径13cmと小さい。これは小破片であるため参考程度に止めておくべき資料である。なお口縁端部の内側が肥厚しており，胎土も精良であることから平安京付近から運ばれてきた可能性もある。色調は淡褐色。７は内底面にジグザグ暗文を施した瓦器椀である。当該地で発見された瓦器椀のほとんどがこのタイプである。口径15cm，器高4.9cm。

８・９は第２期の整地層（黄褐色土）内から出土した。８は平型合子の蓋で，天井部に草花状文様を施す（型造り）。青白磁。この種の合子は12世紀中葉前後の常滑製経甕と共伴する例が多いようである[注2]。９は青白磁小壺である。型造り。

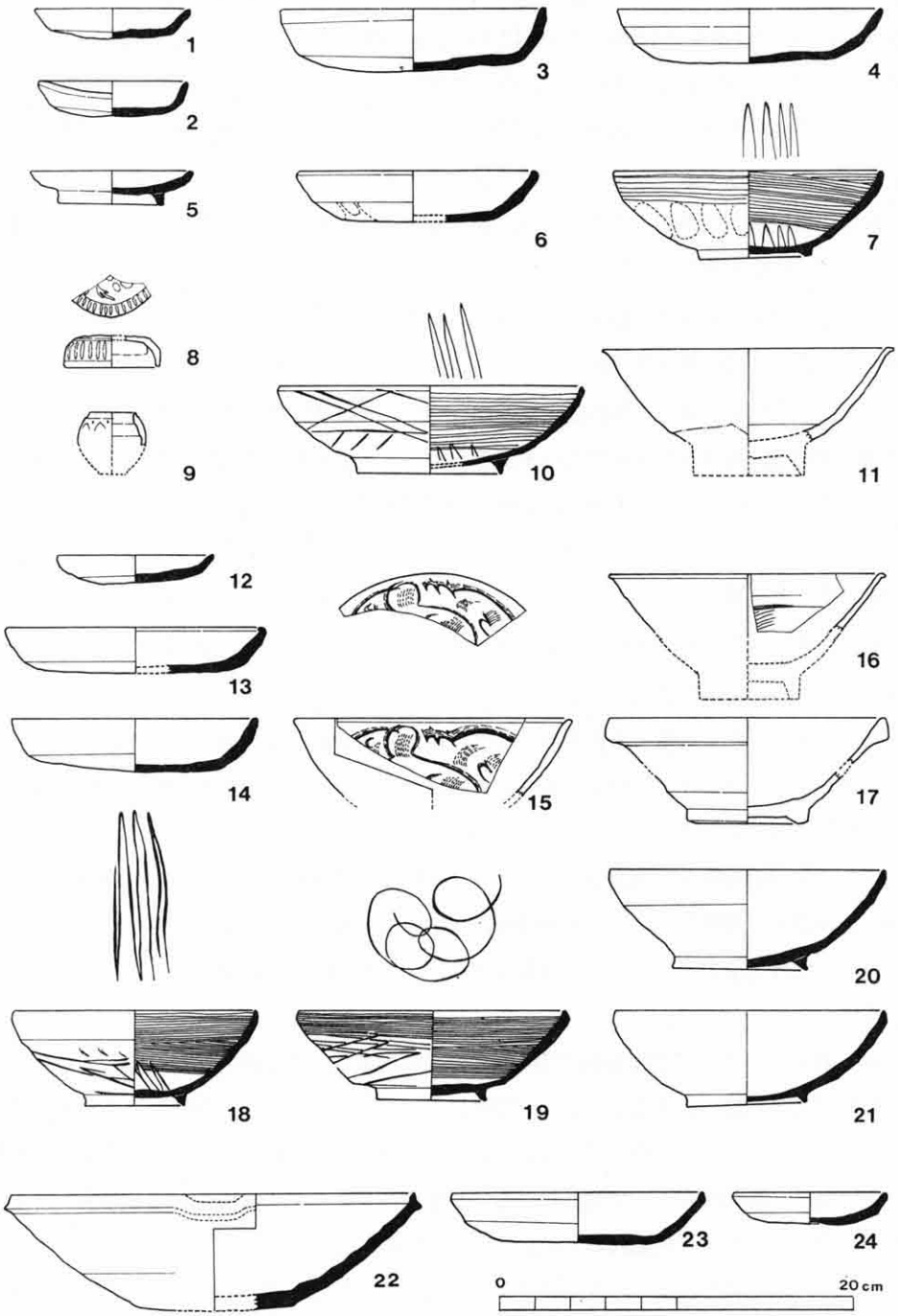
10・11は井戸2から出土した。最上層は第2期整地層で，この土器はその下の灰褐色土から出土した。従って井戸廃絶時に埋没したものと考え得る。10の瓦器椀は口径が17cmと大きく，外面下半にヘラ様工具が当たった痕（爪痕？）があることが特徴的である。11は太宰府での横田・森田分類案の，白磁椀Ⅴ-2に相当する。(注3) 当該地出土の白磁椀はこのタイプがもっとも多い。内面見込み部分に圏線をもつ。内面と外面中ほどより下まで施釉する。

12～21は土壙1から出土した。遺構の章で記述したように，この土器群は一括資料であるので整理箱10箱以上に及ぶ遺物を分析すれば，丹波地方に於ける基準資料となるだろう。12の土師器小皿は口径8.8cm，器高1.6cm。色調は淡褐色。13の同中皿は口径14.4cm，口縁端部内側を肥厚する。14の中皿は口径13.8cm，器高3cm，口縁端部はややすぼまり気味。いづれも口縁部を一段ナデしたもので，ピット1の土師器皿より後出するものと考える。15は龍泉窯系青磁椀である。このタイプは13世紀に通有のものだが，12世紀代に遡る例(注4)もあるようである。16は横田・森田分類の白磁椀Ⅴ-4に相当する。内面に櫛状工具で花文を施す。その上に圏線も施す。胎土は灰白色。17は前掲分類の白磁椀Ⅳ類に相当する。胎土は黄白色で焼成不良。外面下半無釉。瓦器椀は種々のタイプがある。18は口径13.8cmと小さい。外面の中央部に爪痕様の圧痕がある。19は橋本氏分類(注5)の丹波型瓦器椀に相当する。氏は兵庫県の篠山盆地を中心とした資料で型を設定されている。口縁部が太いことと，底径が口径に比して他の例より大きいことの2点に注目すれば，丹波型の設定は妥当と言えよう。20・21は型造りでつくられたように似ている。内外面とも磨滅が著しく調整不明。

22～24は溝1出土。22は須恵器ねり鉢である。硬質に焼き上がっている。ねり鉢は東播系のものが多いが，これが東播系かどうかは判断しかねる。なお灰色のやや軟質に焼き上がった鉢もある。在地系か。23の土師器中皿は口径14cm，器高2.8cm。口縁端部をややつまみ上げており，面取りを意識している。24の小皿は口径8.6cm，器高1.7cm。口縁端部は台形気味で面取りを意識している。

以上幾つかの土器について説明したが，ここで当該地出土土器の編年予察をしておきたい。未だ調査中であり以下あくまで現時点での成果にすぎない。

遺構の分析により，第1期古段階は建物1，同新段階は井戸2，土壙1，溝9と考え得る。そして，ピット1は平安京資料との対比で12世紀中葉～後葉に比定できる可能性を指摘した。今，更に平安京内膳町出土の土師器皿と対比すると，建物1はプロポーションの類似によりＳＥ288上層，土壙1は一段ナデと法量によりＳＤ345，溝1は口縁端部を台形気味に収める手法と法量によりＳＫ385資料に類例を求めることができる。このように土師器皿の出土の仕方は，二段ナデ＋一段ナデ段階→一段ナデ段階→面取り（口縁端部を台形気味にすること）段階と変遷したと理解できる。なお，ピット1出土皿の編年観を補足す



第4図　出　土　遺　物　実　測　図

ピット1；1～4，建物1；5～7，整地層；8·9，井戸2；10·11，
土壙1；12～21，溝1；22～24

ると，抉るような二段ナデを施す内膳町ＳＥ176土器群よりは後出すると考えられる。ＳＥ176資料は文献との対比に於いて12世紀前半で収まる可能性が強く，この考えを踏襲すれば，当土器は12世紀第３四半期に中心を置くと考え得る。また，一段ナデ段階と口縁部面取り段階の土器が当該地の場合，同時期使用されたことは遺構のあり方から推定できる。従って当該地で認められる土師器皿は２様式のみで，ピット１の編年観から第１期古段階は12世紀第３四半期に中心をおき，同新段階は12世紀第４四半期（13世紀初頭まで含まれるか）に中心をおくと推定できよう。

但し上記の編年観は平安京と丹波地方が法量や手法に於いて同様に変化したと仮定した場合であり，今後の整理作業の進展によって補正してゆきたい。

第２期に伴うものは，土師器皿，陶器甕(赤色)，丹波甕，越前甕？，東播系ねり鉢，瓦器杯，褐釉壺，瀬戸灰釉・鉄釉瓶子・おろし目皿・天目茶椀，染付，などである。14世紀に比定できるものがもっとも多く，15・16世紀に属するものは数十点に過ぎない。

3. ま と め

以上のとおり当初の予想をはるかに上まわる成果があった。ここで現時点での要点を列記し，今後の研究の指針としたい。

(1) 第１期古段階は柵１の存在によって，内郭と外郭の２重に亘る施設のあったことが認められる。この中心に建物１があり，外郭に建物５や建物６Ａを配置する。防御機能中心の時期と把握できる。

(2) 第１期新段階は防御施設を一部省略し，丘陵の幅一杯を使って建物を配置する。建物同士は廊下で連結していたと考えられ，居住性を重視している。このような建物配置の類例としては『法然上人絵伝』の漆間時国の住宅などがあり，地頭級の館跡である可能性が高い。

(3) 第１期に伴う膨大な土器は丹波地方の編年作業や，当時の生活様式を考える上で重要な資料となり得る。また，大量（600片以上）に出土した中国製陶磁器は当時の流通機構を考える上で恰好の資料となった。今回発見された中国製陶磁器は同安窯系を始めとする中国南部（福建省周辺）で焼かれたものが多い。また若干ではあるが龍泉窯系もある。橋本久和氏によれば12世紀代のものがほとんどとのことである。

(4) 第１期の遺構には祭祀に関連すると見做し得るものが多い。柱抜き取り穴に埋納された土器群や方形土壙に埋納された土器群を分析することによって，祭祀の具体的なあり方が判明するだろう。これによって在地豪族が祭祀をどのように受けとめ，行っていたかなど，当時の人々の精神生活まで論及できよう。

(5) 文献史料ではこの地は六人部荘内と考えられ，本所が八条院，領家が平頼盛（清盛の異母弟）であったことが知られている。

(6) 第2期は山城として造営されている。およそ百年ほどうち棄てられていたものを，なぜこの段階になって造替したのかが問題となるだろう。第1期を営んだA氏の子孫が再興したのか，まったく別のB氏が新たに造ったのかという問題もある。

なお，第2期末期頃の有様がわかる文献がある。江戸中期に編さんされた『丹波志』には，「古城　古主堀　大内村　古城地平ヲ城ト云，古主堀上総進貞次」とありこの堀貞次は大永年中（1521～1527年）に城を造ったとも書かれている。小字平城という地名からも調査地の丘陵上にある施設がこの「平ヲ城」に相当することがわかる。また，『古城趾見取図巻物』にも同様の記事があり「元亀三年（1572）堀金谷藤原広正　為　赤井が落城」と書かれている。以上の記事を信用すれば，堀貞次が16世紀前葉に城を造り，同後葉に堀広正の時兵庫県黒井城主赤井氏に滅ぼされたこととなる。

上記の記事と調査地の状態を比較検討すると，調査地から16世紀の遺物はほとんど出土しておらず，この点で言えば「城」としての機能を果たしていたと考え得る。現段階ではこの記事と合うのは，丘陵端にある城館と考えている。虎口のあり方[注6]は室町末期のものであるし，福知山周辺の城を見ても40～50mの台形城館が室町時代のものであるのは疑いない。ともあれ巨視的に見れば調査地も室町末期頃までは使われ，それを含めて一帯が「平ヲ城」と言われていたと言えよう。

今後城郭史，植生，地質，文献の各分野と共同研究をし，遺跡の性格を明らかにしてゆきたい。

（伊野近富＝当センター調査課調査員）

注1　平良泰久・奥村清一郎・伊野近富・鷹野一太郎・杉本宏・常盤井智行・橋本高明・谷口智樹「平安京跡(左京内膳町）昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報1980』京都府教育委員会)

注2　亀井明徳「図版272」(『世界陶磁全集第12巻』小学館）1977年

注3　横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国製陶磁器について」(『研究論集4』九州歴史資料館）1978年

注4　橋本久和氏御教示。太宰府出土例。

注5　橋本久和「瓦器椀の地域色と分布」(『摂河泉文化資料第19・20号』摂河泉文庫）1980年

注6　村田修三氏，藤井善布氏御教示。

青野・綾中地区遺跡群の調査〈図版5〉

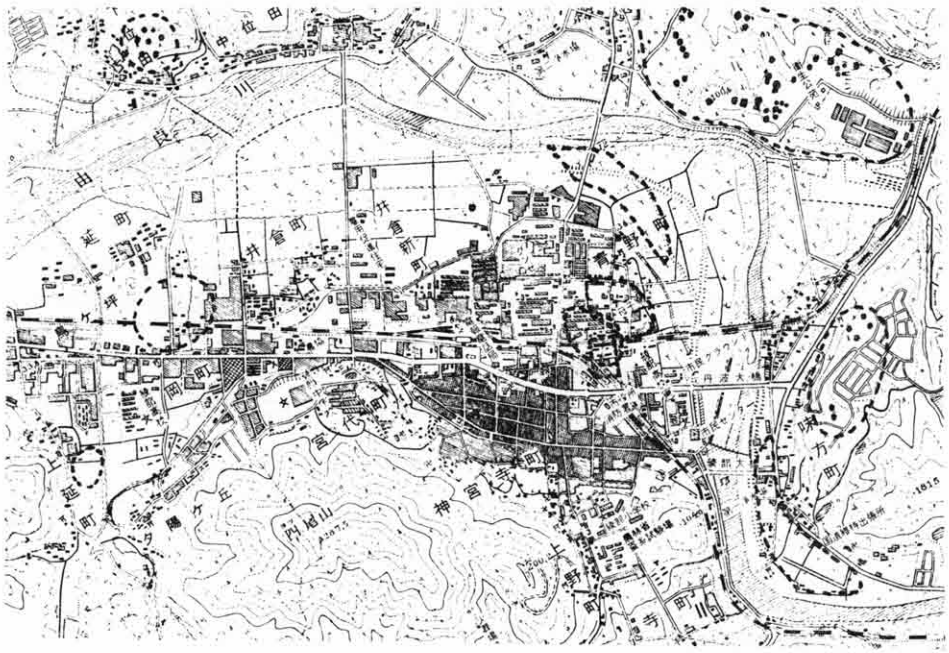
中　村　孝　行

1.はじめに

綾部市青野町・綾中町に所在する青野遺跡，青野南遺跡，綾中遺跡，綾中廃寺を総称して青野・綾中地区遺跡群と呼ぶ。これらの遺跡は広範囲に広がる集落遺跡，墳墓群，寺院跡，官衙遺跡を含み，時代的にもまた遺跡の性格も広範囲に渡っている。各遺跡の概略の説明と，昨年度の発掘調査によって明らかになった青野南遺跡の遺構を中心に見た遺跡群の性格について述べてみたい。

2.　環　　境

京都府下最大の河川由良川の中流域に位置する福知山盆地はその東側約半分を綾部市が占め，綾部盆地とも呼ぶ。由良川本流とそこへ流入する支流とによって形成された沖積平野が弥生時代以降，良好な水田地帯として人々の生活の基盤となったことは，盆地周辺に点在する弥生遺跡や古墳の分布状況から知ることができる。綾部盆地に限って見れば，古



第1図　青野・綾中地区遺跡群位置図

墳分布には1つの特徴的傾向を認めることができる。すなわち，由良川右岸の味方・里・位田・栗・豊里に集中的な古墳分布が見られるのに対し，左岸にはわずかな古墳が点在する程度で，対照的な分布景観を呈していることである。このことは，少なくとも古墳時代においては生産活動の中心が由良川右岸地域にあり，大規模な古墳群，以久田野古墳群を背後に有する，由良川・犀川合流地点付近，現在の豊里町一帯が経済的中心地域を形成していたことを示していると考えられていた。(注1)

ところが，近年の埋蔵文化財発掘調査件数の増加によって，従来の定説的な考え方を修正する必要が生じることとなった。特に，由良川左岸，青野・綾中地区において重点的な調査が実施されるようになり，古墳時代後期以降の遺構が確認されるにつれて，予想以上に早い時期に開発が行われ，また，何鹿郡の中心地となったことが明らかになってきた。

青野・綾中地区において調査が実施されたのは昭和47年度，青野A地点が最初である。その後，青野遺跡の試掘調査，開発に伴う事前調査がくり返され，合計9次(注2)の調査によって前記の4遺跡が確認された。まず，各遺跡の概要を述べておきたい。

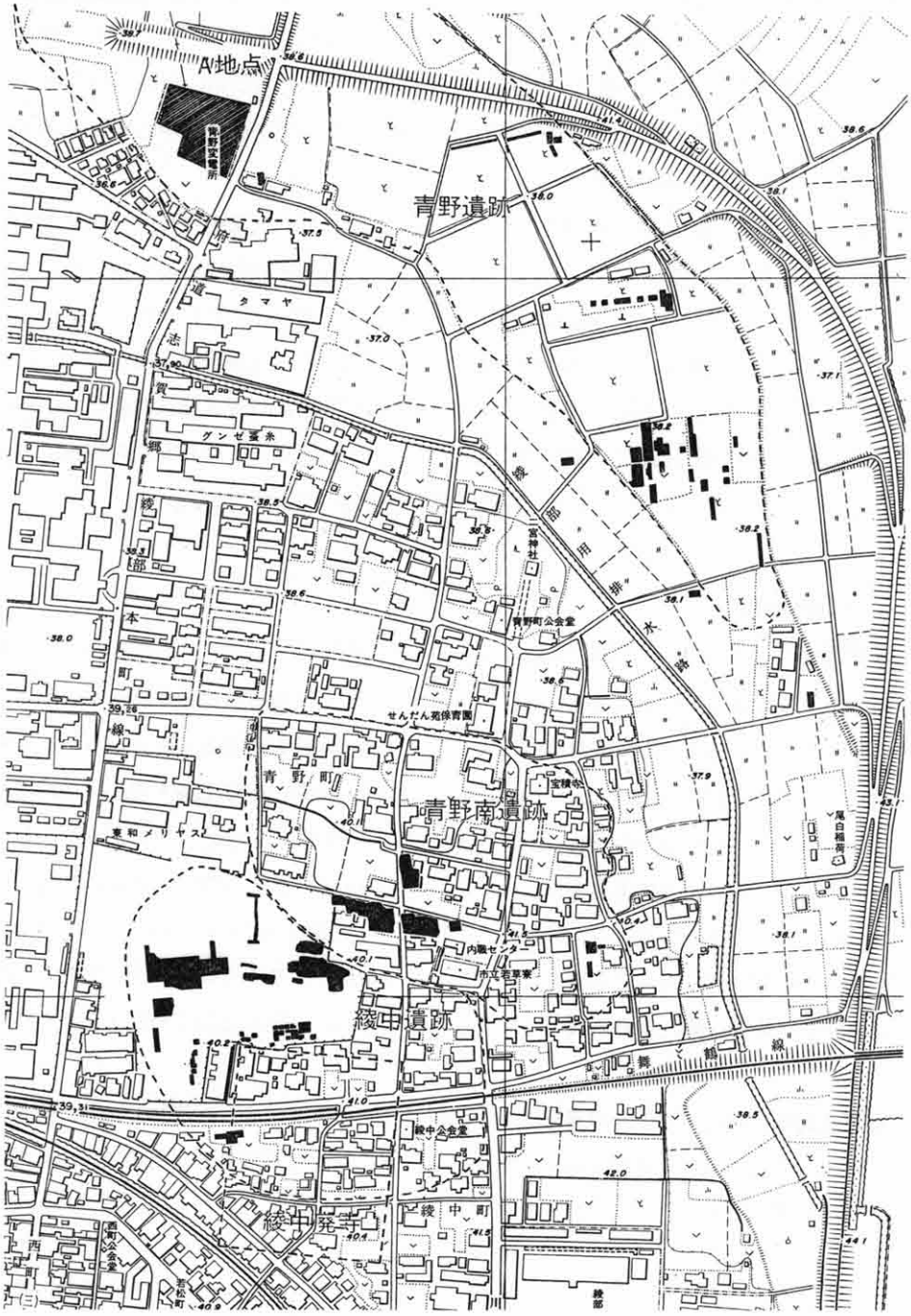
3. 遺跡の概要

青野遺跡は，由良川左岸の自然堤防上に営まれた集落遺跡である。この地域において遺物の分布することは大正年間より知られ，その後も弥生式土器等の採取が報告された。(注3)

昭和47年，遺跡内の一画に関西電力株式会社の変電所が設置されることとなり，約2,900㎡を対象として調査を実施した。その結果，弥生時代中期以降の土壙・溝・住居跡等を検出し，それらに伴う遺物を確認した。その後昭和51・52年度には迫り来る開発に対処するため，青野遺跡の範囲確認調査を行い，続いて同55・56年度にも遺構の状況を把握するために試掘調査を実施した。以上の調査によって，青野遺跡は由良川左岸の三ケ月形の自然堤防状微高地全体に渡って遺構の存在することが指摘できるようになった。またその年代は弥生時代中期以降，奈良時代にまで及ぶと考えられ，一部には縄文時代・平安時代の遺物を含むことが確認された。

青野南遺跡は，昭和52年度の青野遺跡範囲確認調査の際確認された遺跡である。青野遺跡の南西方向に位置し，綾部市街地に連続する河岸段丘面に立地する。この遺跡内に都市計画道路が築造されることになり，昭和56年度，路線予定区域内の調査を実施した。その結果，7世紀前半の竪穴式住居跡のほかに，掘立柱建物，柵列等を検出した。これらの遺構は，建物間に方位的統一性がみられ，大形建物が含まれることなど，官衙的性格を帯びた遺構群としてとらえることができる。この建物群については後に述べることとする。

綾中遺跡は，昭和52年度青野遺跡範囲確認調査の際，国鉄舞鶴線の南側に隣接する畑地



第2図　青野・綾中地区遺跡群調査区域図

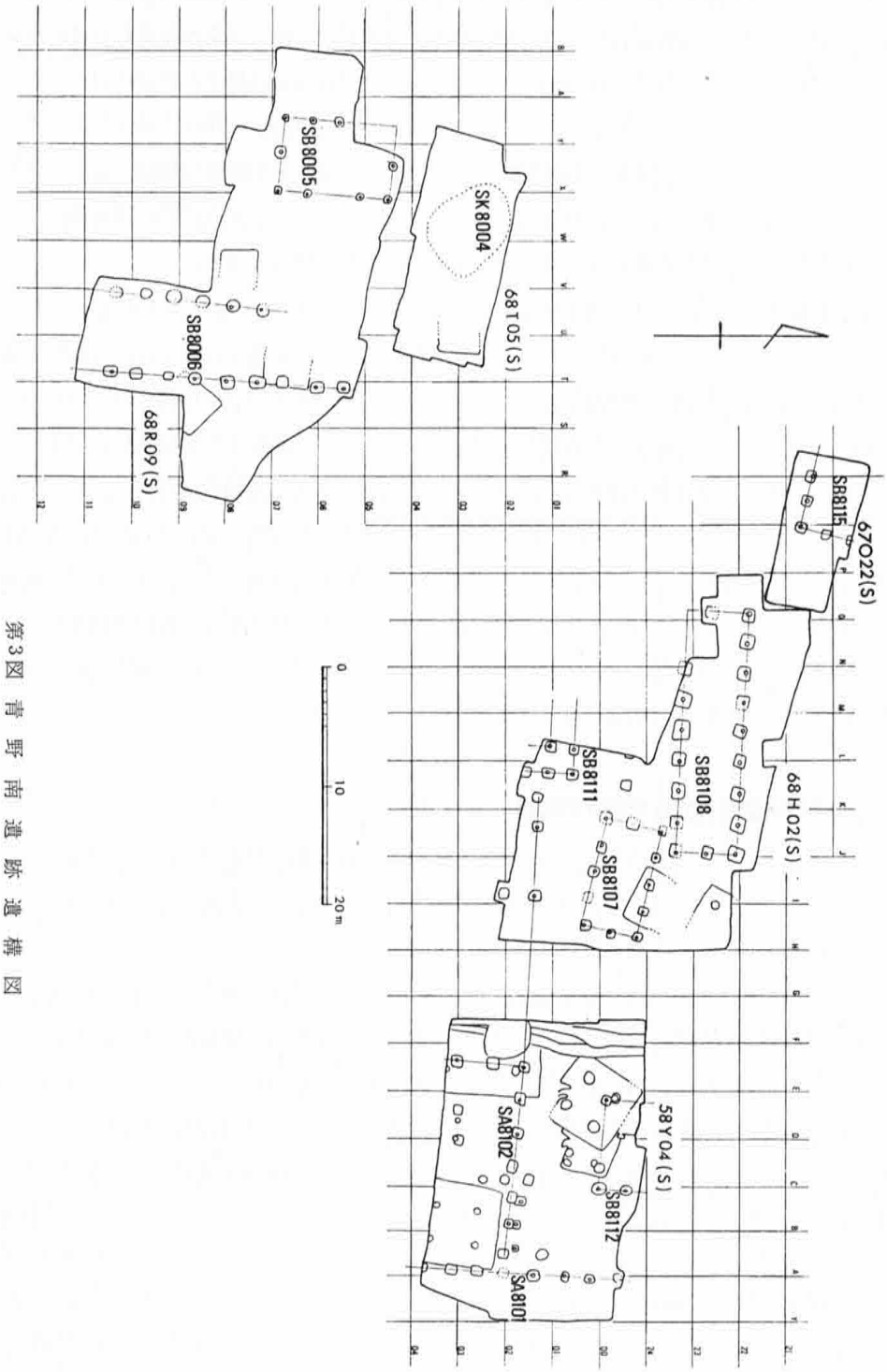
において古墳時代後期の住居跡を検出したことによって確認された遺跡である。この区域は以前には綾中廃寺推定地と考えられていたが，寺院建立以前に集落が存在したことが明らかとなった。その後綾中遺跡の調査は，55年度に神栄株式会社東工場跡地において行われ（綾中廃寺跡第１次•第２次調査），住居跡を検出し，綾中遺跡の存在を補強した。さらに56年度に至り，前年調査の工場跡地の西側部分の調査を，綾中遺跡発掘調査として実施した。この結果，７世紀前半から８世紀初頭に位置づけられる竪穴式住居跡10基のほか，掘立柱建物４棟，溝等を検出し，綾中遺跡の広がりを確認することとなった。

綾中廃寺は，綾中町堂ノ本の畑地から古瓦の出土することにより，昭和初期から注目されていた寺院跡である。昭和52年度の試掘調査では南北方向の溝とピット群，同55年度調査では瓦積み基壇状遺構を検出し，伽藍配置そのものを知る手がかりは得られていないものの，寺院跡の存在を傍証する資料は増加しつつある。出土遺物としては多量の瓦・土器類があり，また表採遺物ではあるが，風招の出土も見られる。瓦類の検討から，軒丸瓦は２種，軒平瓦は４種の存在が知られ，そのうち最も古く創建当時の瓦と思われる素文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦と，三重弧文軒平瓦の組み合わせは，素弁後期後半，即ち天智朝前後に位置づけられている。なお55年度調査において寺院関連遺構と推定した掘立柱建物（ＳＢ8005・06）および土壙（ＳＫ8004）は，56年度調査の状況によって，青野南遺跡の掘立柱建物群との関連性を求めるべきであると考えている。

4.　青野南遺跡掘立柱建物群の考察

昭和56年度青野南遺跡の調査において検出した掘立柱建物及び柵列に，55年度綾中廃寺跡第２次調査において検出し，当初綾中廃寺関係遺構と考えていた掘立柱建物を加え，建物規模と配置からこれら建物群の性格を考えてみたい。

この区域において検出した掘立柱建物と思われるものは７棟を数える。その内ＳＢ8006については調査概報書では建物跡としながら，柵列の可能性も指摘したように，その帰属は決しがたい。しかし，青野南遺跡の建物と柵列を検出した現在，それらとの比較の上で，ＳＢ8006は２列の柵列とするのが妥当と考え，これを除くと６棟の掘立柱建物となる。その内，規模の確認できるものはＳＢ8005・ＳＢ8107・ＳＢ8108の３棟である。このうち最大規模を誇るＳＢ8108は，東西約20.4m（８間），南北約5.1m（２間）を計り，方位は磁北に対しN3°30′Ｅである。この建物と方位的類似性の見られるものとしてＳＢ8005•ＳＢ8111・ＳＢ8112・ＳＢ8006（ＳＡか？）および柵列ＳＡ8101・ＳＡ8102をあげることができ，それぞれの方位のずれは，ＳＢ8108に対し１°以内に納まる。これに対しＳＢ8107は位置的にＳＢ8108とは共存し得ないもので，方位もN12°25′Ｅと大きく異なる。この方位



第3図　青野南遺跡遺構図

に類似するものとしてＳＢ8115がある。

ＳＢ8108を含む一群の遺構間の位置的関係は，まず東西８間のＳＢ8108の中央に南北の中心軸線を設定すると，この中心軸線からＳＡ8101までの距離は約47.75m(1)，ＳＡ8102の中央部から南へ伸びる２個の柱穴までは約29.6m(2)，ＳＢ8006の東側柱列までは約26.8m(3)をはかる。またＳＢ8108とＳＢ8111との建物間距離は約９m(4)となる。(1)～(4)の各々の数値は，１尺を約30cmと仮定した場合，(1)が160尺，(2)が100尺，(3)が90尺，(4)が30尺と近似した値を示す。このことから，29.6cm～30cmを１尺とする基本尺の存在を想定できる。

次にＳＢ8108とＳＢ8111との位置関係について見ると，ＳＢ8111はＳＢ8108のほぼ南正面に位置し，ＳＢ8111の建物規模は不明であるが，総柱建物または廂建物と見えること，また，この建物から東へ柵列の伸びることから門である可能性が指摘できる。しかしＳＢ8108の中心軸線がＳＢ8111の中心を通ると仮定するとＳＢ8111は東西４間の建物となり，門としては不適当と言える。一方東西を７尺３間の門と見た場合ＳＢ8111の中心線はＳＢ8108の中心線より約1.1m東へずれることとなる。ＳＢ8111の性格については，今後の調査を待ちたい。

以上のように，ＳＢ8108を含む建物群には方位的統一性と基本尺を用いた規格的な建物配置が認められることから，同一時期の建物群と見ることができる。

次にこの建物群の年代について考えてみたい。一般に掘立柱建物の場合，竪穴式住居跡等とは異なり伴出遺物の少ないことから，年代決定は困難となる。青野南遺跡においても，掘立柱建物の前代に位置づけられる竪穴式住居跡が豊富な土器類を出土し，７世紀前半に比定できるのに対し，掘立柱建物の柱穴掘形からはわずかな瓦片と土器類が出土したのみである。ＳＢ8108の柱穴掘形からは，綾中廃寺の瓦（Ｉ類）が出土し，また，陶邑編年[注4]で第３段階に位置づけられる須恵器の出土したことなどから上限については７世紀後半に求められるが，一方下限を画する良好な資料はない。この付近一帯の出土遺物が，中世のものを除くとおおむね８世紀前半までのもので占められることや，建物群が２期程度と認められることから，この建物群は，７世紀後半から８世紀初頭に成立し，その存続期間は比較的短期間であったことが推定できる。今後この建物群の年代決定に関与する可能性がある遺物として，綾中廃寺55年度調査のＳＫ8004の土器類があげられる。この土壙は当初綾中廃寺に関する遺構とし，土器廃棄の土壙と考えた。出土した土器類は供膳用のものであることから，この付近に厨房施設の存在が想起され，短期間に多量の土器が投棄されている状況から，当初は寺院の僧房と食堂の存在を推定した。しかし今後青野南遺跡の建物群と関連する遺構であるとの確証が得られるならば，ＳＫ8004の遺物をもって掘立柱建物群の年代を推定することも可能となるかもしれない。

最後に青野南遺跡の掘立柱建物群についてその性格を考えてみたい。この建物群については，最初に官衙遺跡と述べたように，一般住居とは異なった建物の規模や配置が見られることから，官衙建物とすることが妥当であり，この地方で官衙と言えば，何鹿郡郡衙跡の可能性が考えられる。部分的な遺構の検出のみによって郡衙であると断定することは早計であるかも知れないし，郡衙建物として認定するために厳正を期した構成条件を設定する説(注5)もある。青野南遺跡の遺構群の場合，検出遺物が少ないことや倉庫を検出していないこと，群構成が明らかでないことも事実ではあるが，他の多くの条件を満たし，今後の調査によって不備の補われる余地も十分に残されている。郡衙成立の前提として多くの場合豪族の拠点であることも指摘されるが，青野南遺跡周辺には古墳のほとんど存在しない反面，近年の調査で明らかとなった「7世紀住居跡群」や，奈良時代前期創建の綾中廃寺の存在は郡衙成立の前段階に，強い経済的背景を有した豪族の存在を裏づけるものと言える。これらの諸条件から青野南遺跡の遺構群を何鹿郡衙と位置づけておきたい。

5. まとめ

昭和56年度に調査を実施した青野南遺跡の遺構群を中心に，近年の青野・綾中地区調査によって得られた知見を述べてきた。最初に述べたように，特徴的な遺跡分布の見られる綾部盆地にあって，古墳時代後期以降の由良川左岸の開発など，考究すべき問題は多いと思う。ここではほとんど触れることのできなかった「7世紀住居跡群」と，いわゆる「青野型住居跡」の関係など，郡衙成立を取りまく環境を含め，今後に残された課題は多い。

（中村孝行＝綾部市教育委員会社会教育課技師）

注1　『綾部市史　上巻』第四章　律令制下の何鹿郡　1976

注2　以下の青野・綾中地区遺跡群の調査結果は，綾部市教育委員会編『綾部市文化財調査報告』の第2集（1976），第3集（1977），第4集（1978），第8集（1981）による。

注3　『綾部町史』第二章　綾部の昔　1958

注4　中村　浩ほか『陶邑Ⅲ』（大阪府文化財調査報告書　第30集　大阪府教育委員会）1978

注5　山中敏史「古代郡衙遺跡の再検討―郡衙の成立期を中心として―」（『日本史研究』161号）1976

丹　波　国　分　寺〈図版6〉

樋　口　隆　久

1. はじめに

丹波山地の南端に開けた亀岡盆地は，標高100m 前後の断層盆地である。盆地中央には丹波高原を分水嶺として大堰川が南流し，盆地を二分している。丹波国分二寺は，この大堰川の東岸にあり，愛宕山・牛松山を水源とする七谷川の形成した扇状台地上に位置する。僧寺は，亀岡市千歳町国分小字桜久保にあり現在も浄土宗の寺院としてその名籍を残し，国の史跡に指定されている。尼寺は，僧寺の西方約400m のところ，亀岡市河原林町河原尻にある御上人林廃寺がそれに推定されている。この御上人林廃寺は，昭和47年を第1次として6次に亘る発掘調査により，その伽藍配置，諸堂宇の規模等が明らかにされた。また寺院跡発掘に伴って，弥生時代前期から古墳時代後期にかけての遺物・遺構が検出されたことは，寺院創建に至る経過を知るうえで重要な資料を提供してくれた。

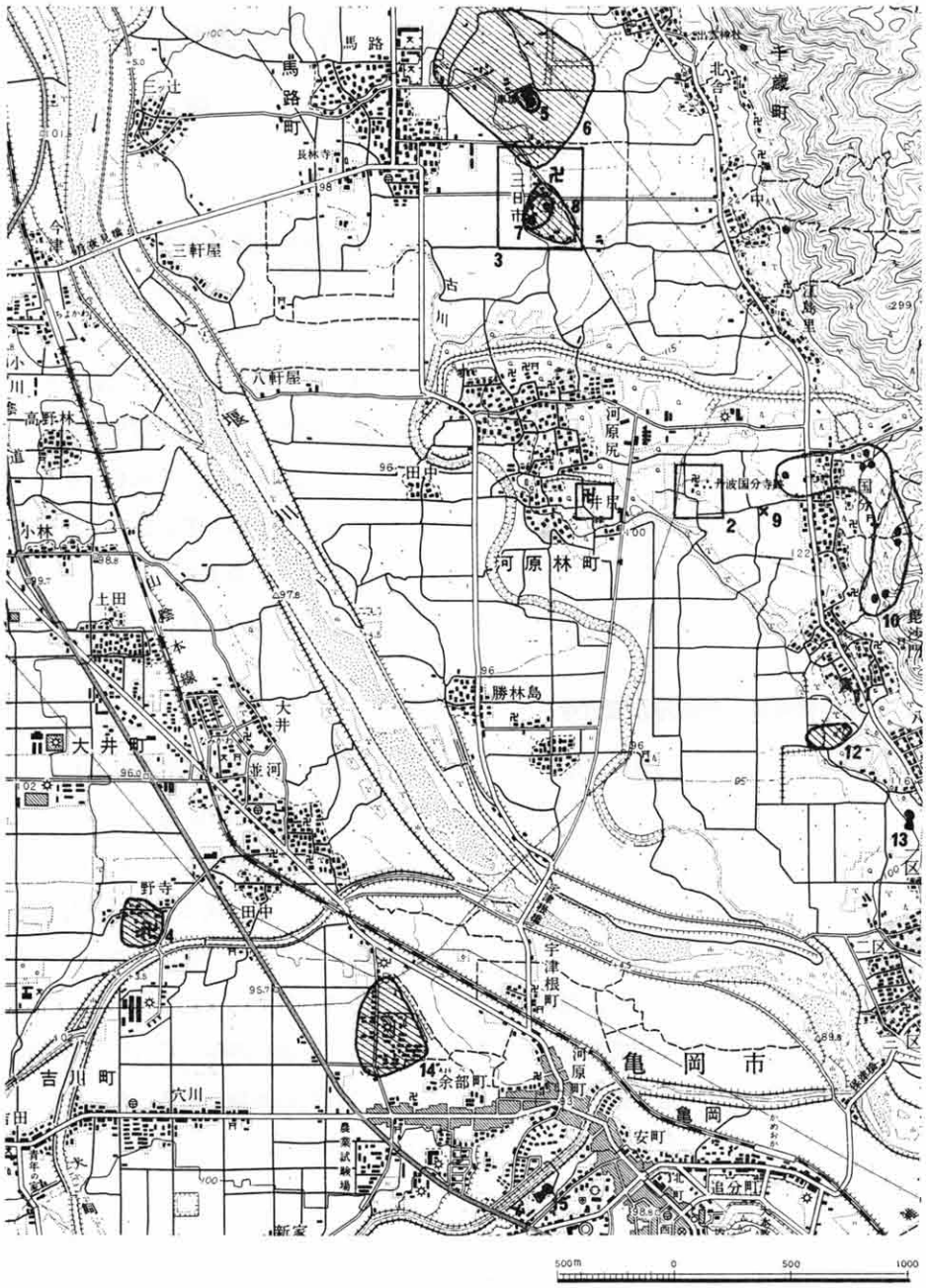
2. 国分僧寺跡（史跡丹波国分寺）

国分僧寺の創建については，文献等もなく不明であるが，丹波国は『延喜式』にいう上国に位置づけられていることから，天平13年（741）以後の早い時期に建立されたものと考えられる。また同じ『延喜式』によると，寺料として四万束の稲が充てられており，さらに平安時代後期の軒瓦等も発見されていることなどから，平安時代にもかなりな寺勢をしのぶことができる。中世になると文献資料もなく不明であるが，寺伝によると，天正年間に明智光秀の焼き打ちに合い，礎石等を城譜請に持ち去られたと伝える。

その後の再興についても明確ではないが，当寺本堂に「元録十四年（1701）11月，国分寺正円坊寄進」の銘文をもつ鰐口が有ることから，江戸時代の初期に始まったものと推定される。また宝暦年間（1751～1764）には護勇比丘が堂宇を整備したといわれる。現在の本堂はその時の再建である。

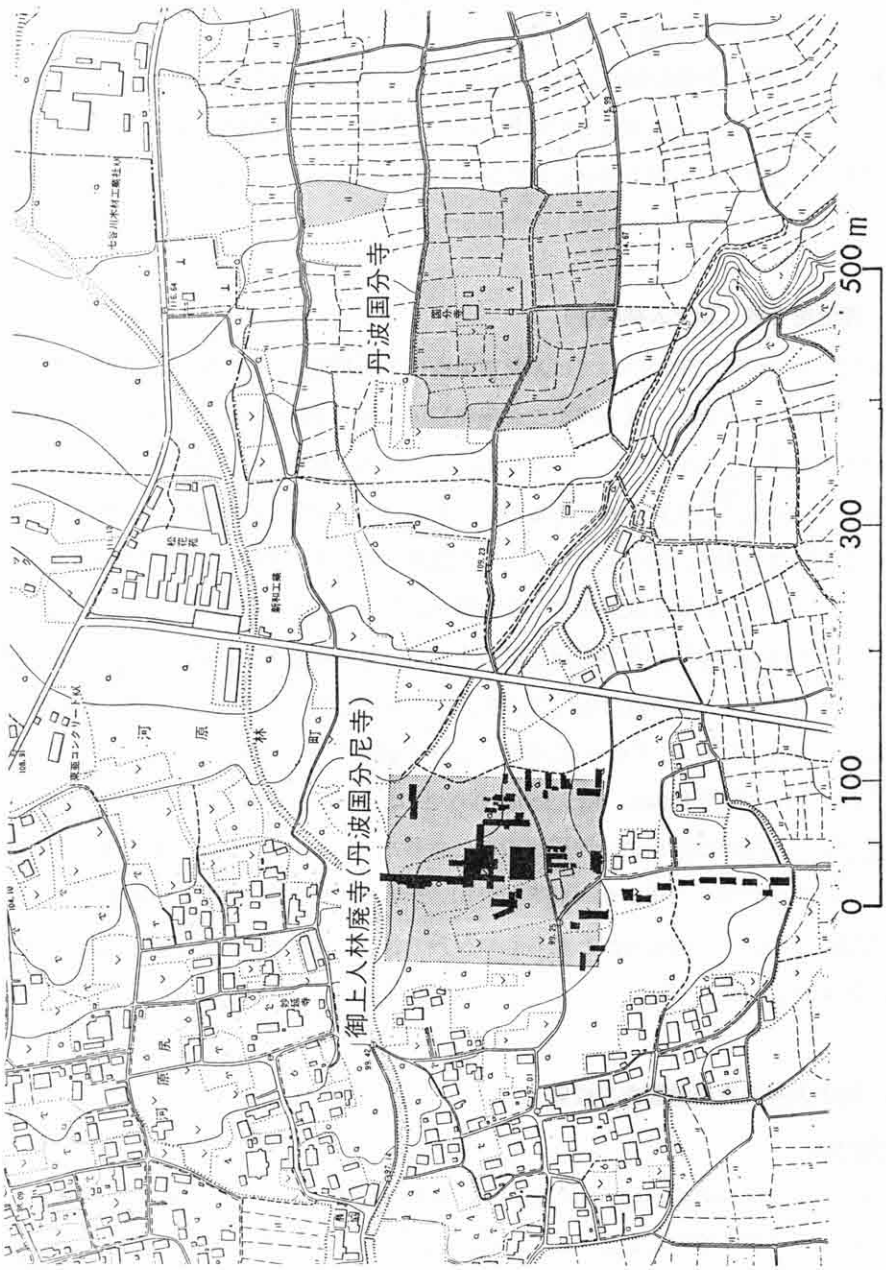
なお国分僧寺創建当時のおもかげを伝えるものには，境内の東南角の高さ約60cm程の土壇上に17個の礎石が確認されている。その配置から七重塔跡と考えられている。この礎石から復原される塔跡の初層一辺は，8.9m，脇間2.9m，中央間3.1mとなる。またこれら礎石は出枘式のもので，大半はその痕跡を残している。礎石では他に塔跡より約20m北側のところにも2個確認されている。その大きさから主要堂宇のものと考えられる。

次に当寺の本堂に安置されていた本尊薬師如来坐像は，像高が87.5cmで裳懸座に坐し施



第1図　丹　波　国　分　寺　位　置　図

1. 御上人林廃寺　2. 丹波国分寺　3. 三日市廃寺　4. 野寺廃寺
5. 出雲車塚古墳　6. 車塚遺跡　7. 三日市古墳群　8. 三日市遺跡
9. 蔵垣地遺跡　10. 出雲古墳群　11. 平松遺跡　12. 桜久保遺跡
13. 保津車塚古墳　14. 余部遺跡　15. 加塚古墳



第2図 丹波国分僧寺・同尼寺位置関係図

無畏・与願印を結ぶ。頭部から腰までを一木造りとするもので，膝前は横材を矧ぎつけている。一部後補の跡が見受けられる。また丸顔で隠やかな表情や，肩から胸にかけての技巧衲衣の表現等に藤原時代の彫刻の特徴をよく示している。この坐像は現在国の重要文化財に指定され，収蔵庫に安置されている。

なお，国分僧寺の伽藍配置の復原について，今までは東西に塔を配する二塔式のもので全国でも類例を見ない特異な例として考えられて来た。しかし地形測量などから，塔と金堂を東西に並立させる法起寺式の配置を取る可能性も出て来ている。今後の発掘調査に期待したい。

3.　国分尼寺跡（御上人林廃寺）

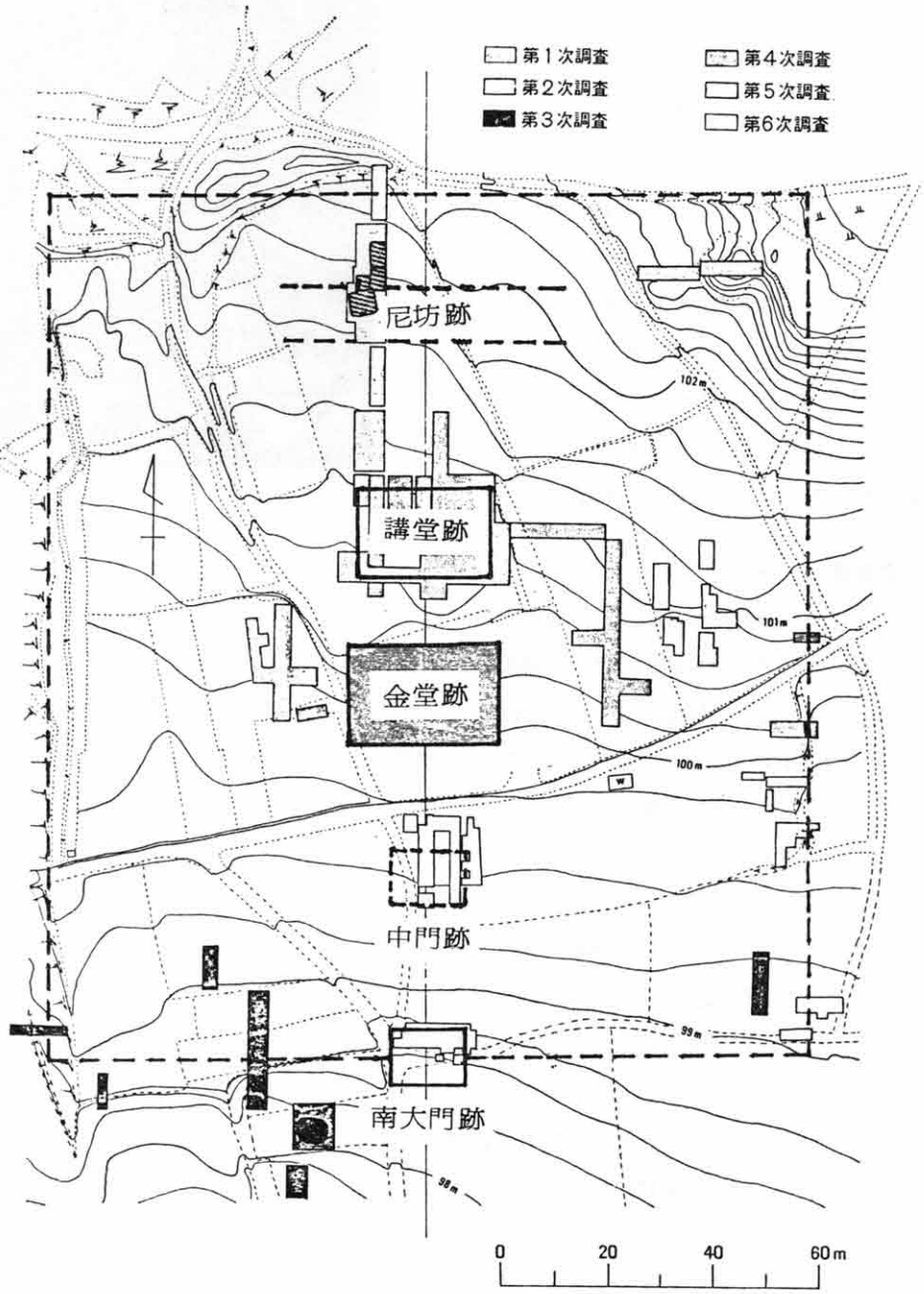
丹波国分尼寺の所在地については，角田文衛氏が昭和12年に亀岡市篠町篠観音芝の観音芝廃寺に推定された(注1)説と，八木茂美氏が昭和13年に亀岡市河原林町河原尻の御上人林廃寺に推定された(注2)説などがあった。この2箇寺のうち御上人林廃寺は，昭和47年に染色工場建設に伴う緊急発掘調査(注3)を行い建物跡基壇を検出した。この調査を契機に当廃寺が国分尼寺跡として注目を集め，以後6(注4)次に亘って寺域及び諸堂宇の規模，配置等を確認する調査を行った。その結果，第1次調査では金堂跡を，第3次調査では寺域南限及び西限の土塁を，第4次調査では尼坊跡及び寺域北限の土塁を，第5次調査では講堂跡及び寺域東限の溝を検出した。さらに第6次調査では南大門跡を検出したことにより，当廃寺の主要な堂宇が南北一直線上に並ぶ，いわゆる東大寺式伽藍配置をもった寺院跡であることが判明した。また寺域が東西約150m，南北180mありその南限が約400m東にある国分僧寺跡の推定南限と同一条里線の東西に並ぶ位置関係にあること。さらに出土瓦に同種のものがあること。古い小字名に「二時ケ堂（尼寺ケ堂）」「シャカン堂（釈伽堂）」「薬師前」「踊場」等の寺院跡に関連するものと思われるものが残されていることなどから，当廃寺が丹波国分尼寺跡であると判断した。

4.　御上人林廃寺発掘調査の成果

南大門跡

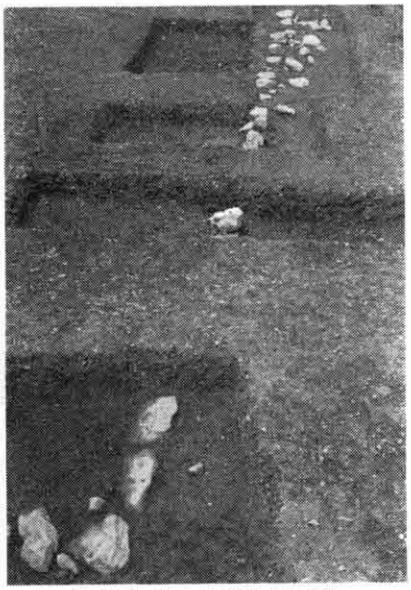
金堂跡基壇南縁から南へ約53mの位置で，東西方向に並ぶ石列を1.9m検出した。この石列は，北側の面を整えた状態で，石列の北側に瓦の堆積がみられることから，南大門の北縁であると判断した。しかし表土から35cmと非常に浅いため，開墾，耕作等によりその殆んどが滅失してしまった状態である。

石列は，金堂跡・講堂跡基壇と同様，自然石を用いた野面積基壇の最下段，地覆石にあ



第3図　御上人林廃寺伽藍配置図

たるものである。このような遺存状態では，地覆石からの基壇規模の復原は不可能である。そこで基壇内部の精査を行い，北縁から2.4mのラインで伽藍中軸線から東へ1.8m，同4.8mの位置で礎石の根石を確認した。さらに南側3mのところでも各々確認し，合計4箇所の根石を確認したことになり，それらから南大門跡の規模を推定すると次のようになる。建物は，東西梁行9.6m，南北奥行6mとなり，東西三間，南北二間の総柱，八脚門と推定した。柱間は，脇間3m，中央間3.6mとなる。また建物規模が推定できたことから，基壇の規模も東西14.4m，南北奥行10.8mと推定される。



第4図　御上人林廃寺金堂跡

金堂跡

金堂跡は，調査前から高さ約70cm程の土壇を形成しており，布目瓦の散布が見られ，また以前には土壇上にも数個の礎石が認められたとのことである。

今回検出された石列は，長径40～50cm程の丸味をもった自然石を用いた野面積基壇の最下段，地覆石にあたるものである。この石列南側部分は，東西約22mを検出し，その東端には三角形を呈した隅石が据えられ，直角に北側へ曲っていた。またこの石列東端から西へ約7mと約20mの地点では南へ1.2m張り出した形となっている。その間には大きな礫が多く見受けられる。これは南縁に取り付く階段の痕跡と考えた。次に石列東側部分では南北18mあり，北端にも三角形の隅石が据えられている。さらに北側部分では，東西約18mを確認したが，それ以西については調査対象外となるため確認出来なかった。なおこの基壇の内部構造は，試掘調査にとどまり全体にわたる調査が行われていないので不明である。

金堂跡基壇の規模については，第5次調査で講堂跡の規模が確認されたことにより推定することが出来た。すなわち基壇規模は，東西27m（90尺），南北18m（60尺）となり，南北両縁の中央には長さ約13mの階段が取り付いている。また基壇内部の建物跡も東西梁行は七間で21.8m，中央三間が各々11尺，脇間が各々10尺となり，南北奥行は四間で12.6m，中央二間が各々11尺，脇間が各々10尺の間取りをもった五間四面と推定される。

講堂跡

金堂跡基壇北縁より約15m北側の地点で，南側の面を整えた石列を確認した。その位置

第5図 御上人林廃寺講堂跡実測図

第6図　御上人林廃寺講堂跡

関係から講堂跡基壇南縁であると判断した。石列は，金堂跡と同様自然石を用いた野面積基壇で，最下段の地覆石にあたる部分のみが残ったものであり，その規模は，東西25.8m（85尺）南北奥行16.8m（55尺）であった。特に南縁の遺存状態が良く，15.5mにわたる石列を確認した。東縁は1.3mの遺存，西縁及び北縁は全く確認できなかった。しかし遺物の出土状況，堆積土層の相異等により判断し得た。すなわち基壇内部は暗茶褐色粘質土で出土遺物も古墳時代の須恵器や土師器等であるのに対して，基壇外部では明茶褐色土で寺院創建以降の遺物である須恵器，土師器，緑釉陶器，灰釉陶器，瓦の包含層となる。

基壇の外部施設として南縁中央に階段の痕跡を認める。その規模は，東西4.5m（15尺）南縁からの張り出しは1.2m（4尺）である。

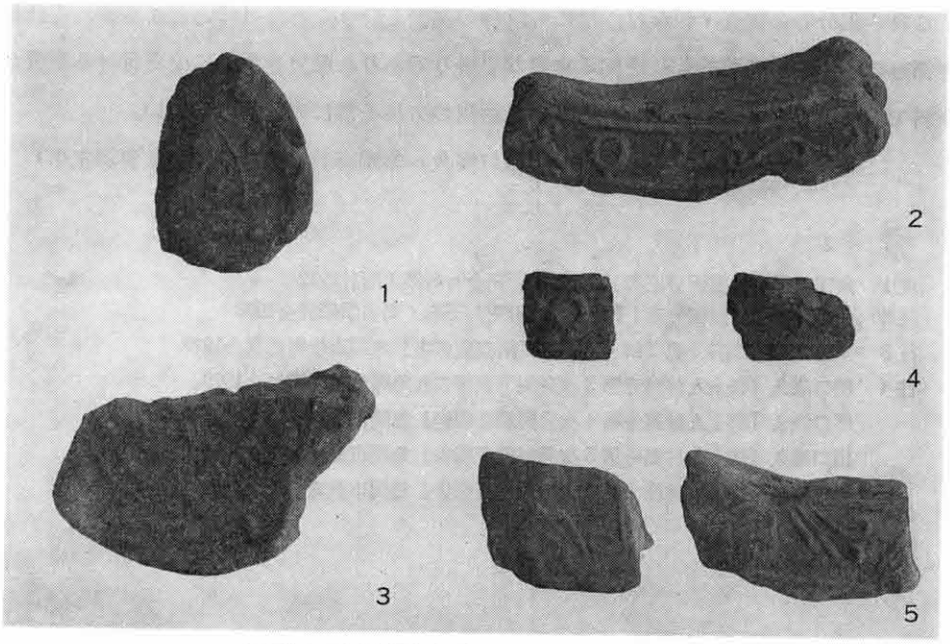
次に基壇内部の建物跡の規模は，検出した礎石根石を基準にして割り付けると，東西梁行七間，南北奥行四間の，全て10尺（3m）等間隔の間取りをもつ五間四面の建物跡が想定される。また階段の張り出し，根石の状態からみて基壇の高さは約0.9m（3尺）程と推定される。

尼坊

第6次までの調査のなかで尼坊としての顕著な遺構の検出は出来なかったが，第4次調査のなかで遺物の出土状況が講堂跡北縁と同様なところが2箇所あった。すなわち講堂跡北縁より北へ28mと約38mの地点で，共に東西方向に延びる様相を呈していた。この2箇所からは瓦片が多く出土し，その間は出土しなかった。このことから，この2点間を建物跡と想定すると，その規模は，東西方向は不明であるが，南北奥行は10尺二間で軒の出が2.3mの複廊と考えられる。またその位置関係から尼坊と考える。

寺域の境界

当廃寺の寺城は，東西が約149.4m（500尺），南北約179m（600尺）となり，やや南北方向に長い方形を呈している。また四至を画する各々の境界は，拳大から直径約30cmの礫を混ぜた茶褐色粘質土をつき固めた土塁を廻らせている。その幅は約3m前後である。こ



第7図 丹波国分寺・同尼寺出土瓦
1～2，丹波国分寺出土
3～5，御上人林廃寺出土

れら土塁遺構の大半は，後世の耕作により削平されているが，西辺，北辺及び東辺北側部分にはその痕跡を止どめる箇所も見受ける。また東限については，土塁遺構の外側に幅1.2m（4尺）の溝が確認された。これは寺域の占める地形が，東北側から西南方向にかけてゆるやかな傾斜をもつことから，寺域東限の東側からの水の流入を防ぐ水切り溝の役割りをもつものと推定した。

さらに寺域の東北隅では，寺の傍示を目的として構築された，直径12m，高さ1.5mの隅塚を確認した。

5. おわりに

国分寺とは，天平13年（741）2月14日，聖武天皇の発願により国毎に建立されたもので，金光明四天王護国之寺（僧寺）と，法華滅罪之寺（尼寺）との二箇寺で構成される。従ってその保存及び活用については，常に対として考えて行かねばならない。現在僧寺については，丹波国分寺として国の史跡として指定され現状保存されているが，その伽藍配置や規模については不明である。また同尼寺である御上人林廃寺については，過去6次にわたる調査の結果，東大寺式伽藍配置をもつ寺院であることが判明したが，その保存及び活用については今後の課題として残されている。

これら国分寺の調査・保存は，単に寺院跡の調査ということだけにとどまらず，古代地方都市の政治的・文化的背景を知る重要な手掛りであり，歴史を現代に位置付ける重要な資料でもあることを念頭におき，よりよき活用の方法を常に考えて行きたい。

（樋口隆久＝亀岡市教育委員会社会教育課主事）

注1　角田文衛「丹波国分尼寺」『考古学研究会々報第1回』1932
注2　八木茂美「丹波国分寺」『国分寺の研究』下巻　考古学研究会1933
注3　安井良三・江谷　寛『御上人林発掘調査報告書』亀岡市教育委員会1973
注4　樋口隆久『御上人林廃寺第3次発掘調査報告』亀岡市教育委員会1978
　　樋口隆久『御上人林廃寺第4次発掘調査報告』亀岡市教育委員会1979
　　樋口隆久『御上人林廃寺第5次発掘調査報告』亀岡市教育委員会1980
　　樋口隆久『御上人林廃寺第6次発掘調査報告』亀岡市教育委員会1981

「銅出徐州」の銅（その1）

——考古資料ノート ②——

福　山　敏　男

前回の記事でのべたように，三角縁神獣鏡に関する王仲殊氏の論文（『考古』1981年第4期）では，鏡銘の「銅出徐州」の句をとりあげ，三国魏の徐州の治所である彭城（今の徐州市）の付近からは古来銅を産しないことを指摘し，銘文のこの一句に疑問を投げかけている。これは，ちょっと気になることであるので，私は手もとの資料を，数カ月を要して，色々調べ，その成果を要約してこの短文を書くことにした。

中国科学院考古研究所が1956年12月から翌年3月まで，発掘に従事する見習員のために北京で行った講義を集めた本が同研究所編『考古学基礎』（1958初版）である。そのうち「秦漢考古」という題目の後半「秦漢」が王仲殊氏の分担した講義で，そこには「漢代産銅地很多，但以徐州和丹陽為最有名」と書かれている。つまり，「漢代の銅の産地は多いが，徐州と丹陽が最も名高い」といわれている。この「徐州」は三角縁神獣鏡などの銘文に「銅出徐州」とあるのを採用してこのように言われたのであろう。当時の段階では問題の鏡銘について王氏は疑問をもってはいなかったわけである。（疑問があれば採用されなかっただろうと思われる。）ところが，昨年の同氏の論文では態度を一変し，「銅出徐州」の句に不信感を表明されるに至ったわけである。

銅を主とする中国の冶金の歴史については，私の手もとに十分な資料があるわけではない。王氏の引用する翁文灝『中国砿産志略』（1919刊），章鴻釗『古砿録』（1954刊）の二書は私は見たことがない。戦国時代までを取扱ったものとしては郭宝鈞『中国青銅器時代』（1963刊）があり，最近の本では北京鋼鉄学院≪中国古代冶金≫編写組『中国古代冶金』（1978刊），夏湘蓉・李仲均・王根元編著『中国古代砿業開発史』（1980刊）などは手もとにあるが，『中国冶金簡史』（科学出版社刊）は未見である。

ただし前記の夏氏等の『開発史』には「銅出徐州，師出洛陽」の句と並んで，「銅以徐州為好，工以洛陽著名」という鏡銘もあると記してあるが，これは眉つばものである。また「歴史文献の記載によると，徐州の東北に銅山があり，その地点は現代の江蘇省徐州地区の銅山県である。東漢末年では丹陽の地は呉国の勢力範囲に属し，そこで産する銅は北方では利用し難くなった。当時（漢の）都は洛陽にあり，交通の大道は徐州に直通しており，そのため中原地区の銅の源は，主として徐州の冶銅業によって供給されたとみること

ができる」という意味のことを記してある。これは徐州付近から昔は銅を産出したことを肯定しており，同じ土地からは昔も今も銅を産しないとする王仲殊氏の主張とは正反対である。『開発史』の方もいささか書き過ぎたと思われる箇所があり，こういう点はよく注意して読むべきである。

古くは『尚書』禹貢に「淮海惟揚州，……厥貢惟金三品」とあり，金三品というのは鄭玄の注では銅三色とし，いわゆる孔安国伝では金銀銅と解釈している。ここで揚州というのは淮水から南で，東は海に至る地域であり，彭蠡（鄱陽湖）や震沢（太湖）を含んで，今日の江蘇・安徽両省の大部分と浙江・江西・福建省にわたる広い範囲であったといわれる。鄭・孔いずれの解を採るにしても，金三品には銅が含まれるから，この古揚州の地域から銅を産することは古くから知られていたわけである。なお『尚書』禹貢の荆州の条にも「厥貢……惟金三品」とあるから，揚州の西隣の荆州かでも銅を産していたことがわかるが，当面の「銅出徐州」の問題には縁が遠いので，一言するに止めておく。

戦国時代の書といわれる『周礼』夏官司馬の職方氏に九州の国をあげるうち，「東南を揚州という。その山鎮を会稽といい，その澤藪（大澤）を具区（太湖）という。その川は三江（漢江・岷江・彭蠡とする鄭玄の説その他がある），その浸は五湖（太湖とする説その他がある），その利は金・錫・竹箭」とある。金のうちには，前記のように，銅が含まれる。錫はスズ（『周礼』のこの条の鄭注に「鑞也」とし，『説文解字』には「錫，銀鉛之間也」とある）である。『周礼』考工記には「呉粤之金・錫，北村之美者也」とあり，呉粤（呉越）の金（銅）と錫が良質であることをたたえている。これは前記の職方氏の条と調子を合わせたような形になっている。考工記は『周礼』における後補の部分といわれる点から，そのように考えられるわけである。

また考工記には「攻金之工」として，鋳造時の金（銅）と錫の配合の比率六斉（六種）を記している。そのうち錫の量の最も多いのは鑒燧（鄭玄の注によると，太陽から火を，月から水を採る凹面鏡や普通の鏡のこと）を造る場合で，「金・錫半，謂之鑒燧之斉」と記してある。「金・錫半」は「金・錫半ばす」と読むのが普通であろう。本田二郎『周礼通釈』（昭和54年刊）473頁にもそのように読み下してある。ところが，前記鄭宝釣『中国青銅器時代』12頁では「金・錫半」を百分率で「銅 66.66，錫 33.33」つまり「銅一，錫半」と解釈している。他の五種の配合の記法に準じて「二分其金而錫居一」と書いてあれば文句のないところであるが，それを「金・錫半」と略記したものと鄭氏は考えたのであろう。今日の合金試験によると，青銅中の錫の成分が17—20%のときが合金は最も強靱であること，30—40%のときは灰白色を呈し硬度は最高になること，錫の量がこれ以上にな

ると製品は脆くなることを鄭氏は説明している。こういうことも考えて，「金・錫半」を「金一，錫一」としないで「金一，錫半」と鄭氏は推定したのであろう。一つ教えられたような気もするし，漢文の解釈として「金・錫半」をそんなに読んでもよいのだろうかと頭をかしげたくもなる。「功罪半ばす」という用例もあるからである。

なお考工記の㮚（りつ）氏（量器を作る工人）の条には「凡そ金（銅）を鋳るの状は，金と錫と，黒濁の気竭（つ）き，黄白これに次ぐ。黄白の気竭き，青白これに次ぐ。青白の気竭き，青気これに次ぐ。然る後に鋳る可し」と記してあり，青銅精煉の現場の熱気をはだで感ずるような思いがする。

上記によって，『尚書』や『周礼』のような古典から，古く揚州とか呉越とかよばれた江南の地で鏡を含む銅器の鋳造に必要な銅や錫が産出していたことが知られよう。

先秦の古書といわれる『山海経』の中山経には「出銅之山四百六十七，出鉄之山三千六百九十」（三千六百九とするテキストが古形らしい）とする。『史記』貨殖列伝に漢の全国にわたって「銅・鉄，則千里往往棊置」，つまり銅や鉄の産地が方千里の地に碁石を並べたように布置すると記しているのは，この『山海経』の文をふまえて書いたものであろう。『山海経』のこの銅山・鉄山の記事は『管子』の管子軽重十，地数篇（羅根沢『管子探源』<1930>は管子軽重篇を前漢武帝・昭帝時代の作とする）にも出ている。しかし，このような全国的な総数ではなく，『山海経』で具体的に所在地を示している分では金山193所，銀山20所，銅山30所，鉄山34所，錫山5所が数えられるという（前記『中国古代冶金』31頁）。揚州の金三品，呉越の銅・錫とよばれるものも，その内に含まれているのであろう。

『史記』貨殖列伝には，漢代に江南から産するものの内に「金・錫・連」をあげている。連というのは鉛の未精練の原砿を指すという（『集解』徐広の注）。

同じく貨殖列伝で漢代の経済的発達を総叙した文章のうちに，巴蜀は銅・鉄などに富むという意味の記事がある。巴蜀は今の四川省重慶市あたりを中心とした巴郡と，今の成都市あたりを中心とした蜀郡を指し，中国では江南とならぶ銅の産地として重要なところである。『史記』佞幸列伝に，前漢文帝（前180-157）のとき上大夫鄧通が帝の寵愛を受けて，蜀郡厳道県の銅山を賜わり，鋳造した私銭は天下に流布し，富豪となったことを記している。『塩鉄論』巻1，『漢書』佞幸伝，食貨志下，『南斉書』劉悛伝，『初学記』巻18などにも鄧通と厳道県銅山の記事があり，有名な話になっている。

また『管子』管子軽重八，山權数篇には「湯以莊山之金，鋳幣」とあり，同書管子軽重十七，軽重戊篇にも「鋳莊山之金，以為幣」とある。前漢宣帝（前74-49）のときに桓寛が編集した『塩鉄論』の力耕篇にはこのことを記して「莊山」を「厳山」に作っている。

そういう点から，馬非百『管子軽重篇新詮』(1943起稿，1979刊）上冊10頁と309頁に，後漢の明帝の諱が莊であること（『後漢書』明帝紀）から，それを避けて，(『管子』の)「莊山」を（『塩鉄論』で)「厳山」に改めたものとし，厳山は蜀の厳道山であろうとしている。馬氏の論法によると，明帝以前は厳道銅山は莊道銅山とよばれていたことにもなろう。しかし，『史記』や『漢書』も「蜀厳道銅山」と記しているから，厳道県であり，莊道県ではあるまい。馬氏と反対に，「莊山」というテキストの方が古い形で，これを『塩鉄論』の写本で「厳山」と改めたのかも知れない。結局，『管子』の莊山が果して蜀の厳道県の銅山のことであるのかどうか（商の王湯が勢力圏外の巴蜀で貨幣を鋳造するとするのはおかしい)，馬氏のように割り切らずに，懸案としておく方がよいと私は考えている。

巴蜀の銅山のことで道草を食ってしまったが，これも「銅出徐州」の銅とは縁故が薄いので，この程度で止めておこう。

江南では『史記』に出ている章山の銅や，漢代の鏡銘などに頻出する丹陽の銅などがある。それらの資料の整理と，「銅出徐州」の銅との関連については次回に書くことにしよう。(820213)

（福山敏男＝当センター理事長）

昭和56年度発掘調査略報

6. 橋　　爪　　遺　　跡

所 在 地　熊野郡久美浜町橋爪

調査期間　昭和56年8月10日～10月3日

調査面積　776㎡

はじめに

熊野郡久美浜町に所在する橋爪遺跡は，戦前から遺物の散布する地として知られており，昭和42年[注1]，55年の2度[注2]にわたって発掘調査が行われている。これらの調査によって当遺跡が弥生時代中期（畿内第3様式）から古墳時代前期まで継続する集落遺跡で，歴史時代の遺物散布地でもあることが確認されている。ここに紹介する調査は過去2回の調査結果と合わせて，橋爪遺跡の集落立地，面的な広がりを考える上での新たな資料を提供するものであった。

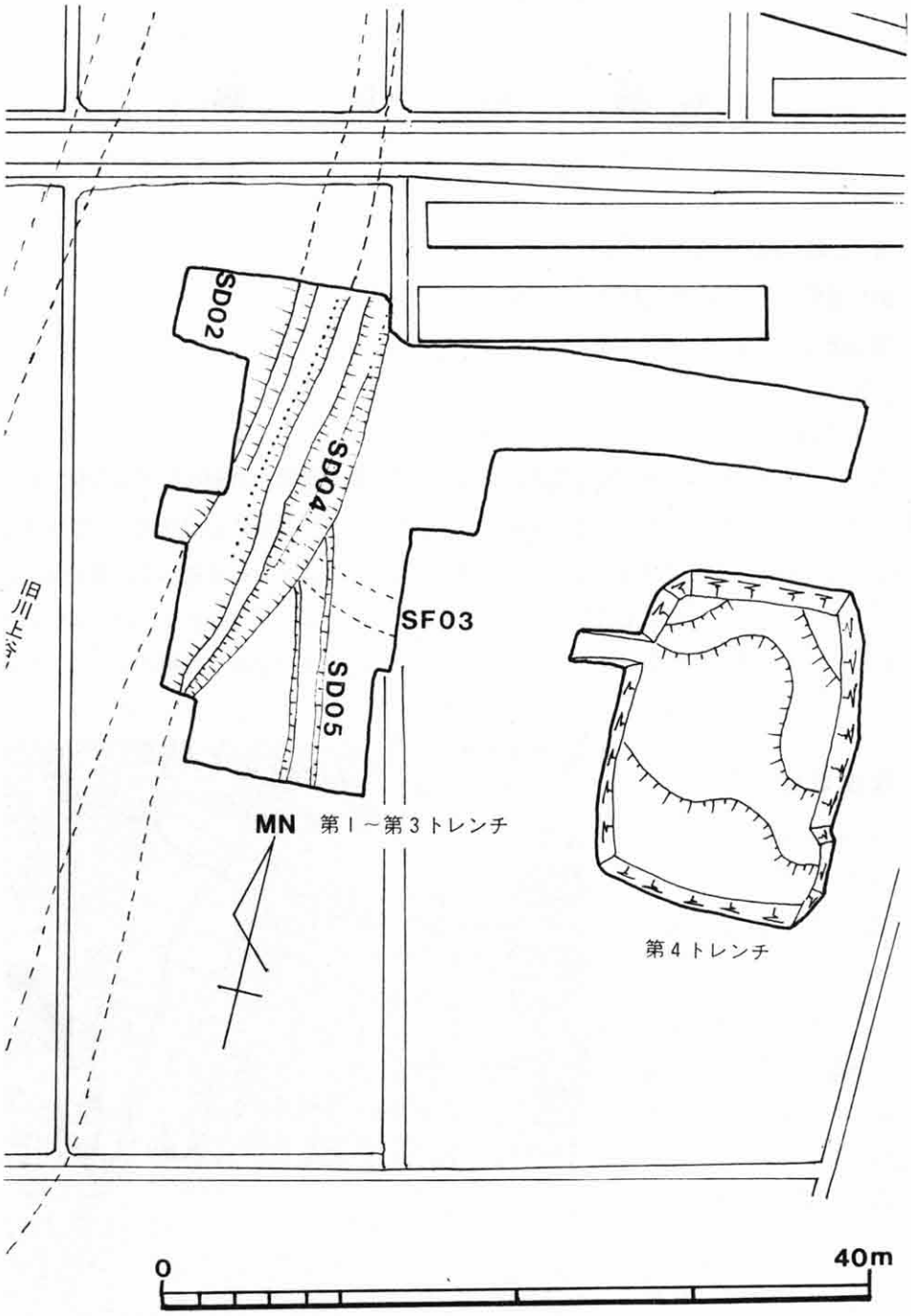
調査概要

今回の調査地は，前2回の調査が丘陵先端で行われたのに対し，沖積平野面に位置している。

第1～3トレンチ

調査地内西部（第1～3トレンチ）では，地表下0.4～1.0mで大正7年の河川付け替え工事で埋められた旧川上谷川の東岸を検出した。（第2図）この時の工事によって，調査地の西方約700mの水田では，地

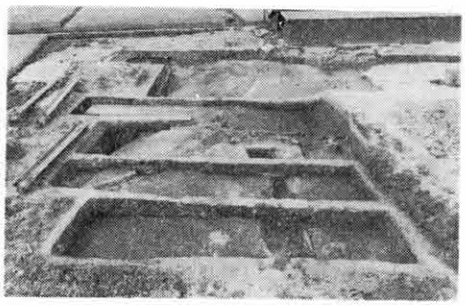
第1図　調　査　地　位　置　図



第2図　調　査　地　全　体　図

下約１ｍで弥生式土器が発見されたことが梅原末治氏の報告によって明らかにされている。(注3)

溝ＳＤ02からは，近年まで使用されていた瓦，陶器類とともに，磨滅した弥生式土器が出土しており，上流域に橋爪遺跡とは別の弥生時代の集落が存在したことが予想される。



第３図　第１～３トレンチ（南から）

溝ＳＤ04は，ＳＤ02と同時期のもので，土手の外側で排水溝の役割をもっていたと考えられる。

畦道ＳＦ03は近世まで使用されていた農道で，橋爪の集落から旧川上谷川に通じていた。地元の古老に記憶はなく，両側に松のくいを打ち込み，土止めとして土を盛った遺構の中からは伏見人形や，近世瓦が出土している。

第４図　第４トレンチ（東南から）

溝ＳＤ05は，ＳＤ02，ＳＤ04，畦道ＳＦ03より古く，溝内からは，鎌倉時代から室町時代に使用された土師器の皿が出土している。

第４トレンチ

第４トレンチは下層遺構の確認を目的として設定したトレンチで，第１～３トレンチとは遺構検出面が異なり，旧地表下２～３ｍで大量の木片を包含する層を確認した。この層は調査によって古墳時代初頭（庄内・布留式並行期）のものであることがわかり，橋爪遺跡内の第１次，第２次調査地と関連して，比高差２～３ｍをもった同一面を形成している。調査地内は北東から南西に傾斜し，何層もの砂の流出によって形成された段丘裾部の様相を呈しており，低地では沼状の低湿地に接する。

ま と め

第４トレンチで出土した木器群は，この水ぎわともいえる低地で発見された訳である。総点数340点以上にのぼる木器群の中には，田下駄のように使用痕を残す，用途の明瞭なものもあるが，ほとんど用途不明品，未製品である。現在これらの木器群は整理中であるが，前２回の資料と合わせて川上谷平野内の弥生～古墳時代の環境を復元する上で貴重な

資料を得たといえる。又，今次調査地が海抜2～3m，地表下2～3mという深さに及んだことで，川上谷平野の沖積面は古墳時代以降かなりの速度で谷を埋めていった結果形成されたものであることがわかる。これは堆積の状況から見て，古墳時代以降，当地方の上流域がかなり活発に開発されていったことを示している。　（戸原　和人）

注1　高橋美久二「橋爪遺跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会）1968

注2　石井清司他「橋爪遺跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報1981第2分冊』京都府教育委員会）1981

注3　梅原末治「海部村石器時代遺跡」（『京都府史蹟勝地調査会報告第2冊』京都府）1920

7. 中　尾　古　墳

所 在 地　与謝郡伊根町亀島字大浦中尾

調査期間　昭和56年８月25日～10月７日

調査面積　100㎡

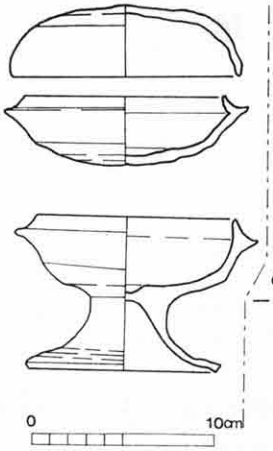
調 査 概 要

伊根町大浦地区において，伊根港道路改良新設工事に伴う事前調査として，中尾古墳の発掘調査が実施された。当初，中世墓とも推測されたが，調査途中で横穴式石室を有する円墳であることが判明した。

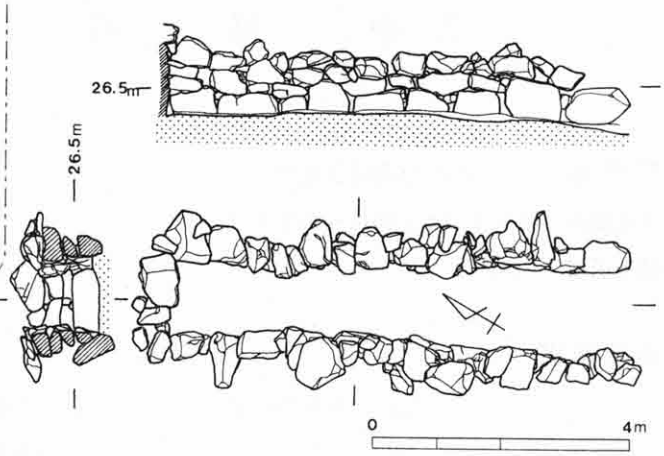
古墳は，伊根湾にむかって南西にのびる丘陵上に立地しており，標高約26.5mを測る。調査前まで畑地として利用されていたため，およそ14m×14mの平坦地をなしている。墳丘は，その畑地開墾の際ほとんど削平を受けていた。しかし，石室から約6.5mの地点で地山面が弧状に掘り込まれており，径13mの円墳であることが推定された。

第1図　中　尾　古　墳　位　置　図　(1:25000)

出土須恵器



石室実測図



内部主体である横穴式石室は，いわゆる無袖式にあたり，全長7.5m，巾1.2mの短冊形をしている。天井石と側壁の上部石は抜きとられ，また石室内に転落しており，埋葬面に至るまで埋まっていた。石室は，ほぼ南東方向に開口しており，石室構築のための掘形は岩盤層まで削平していた。石室の石積は，奥壁およびその付近は比較的整っているが，開口部付近では石の大きさ・積み方等やや雑な印象をうける。

埋葬面は，検出が困難であったが2面あったと考えられる。遺物は，上の埋葬面でほぼ同レベルで検出された。検出状況により，4群に分かれて出土した。また，棺台に用いられたと思われる石も検出された。玄室部と羨道部の区別は明瞭ではないが，側壁の石積み・遺物の出土状況等から考えて，奥壁から約5mの地点がそれにあたると思われる。

出土遺物としては，須恵器の杯・高杯と鉄刀・鉄小刀・鉄斧・鉄鏃などの鉄器がある。須恵器の時期は，田辺昭三氏の編年によれば6世紀末から7世紀前葉にあたるものである。

中尾古墳の周辺での調査もあまりなく，古墳の性格等については詳細な点まで判明したとは言いがたい。ただ，丹後で類例を求めるならば，丹後町の大成古墳群の9号墳があげられようか。

なお今回の調査では，府立丹後郷土資料館および伊根町教育委員会をはじめ多くの人たちの御協力を得たことを感謝します。

（久保田　健士）

<参考文献>
田辺昭三　『陶邑古窯址群Ⅰ』1966
堤圭三郎，高橋美久二　「大成古墳群発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』）1968

8. 下　畑　遺　跡

所 在 地　与謝郡野田川町字三河内

調査期間　昭和56年9月8日～9月11日

調査面積　440㎡

はじめに　野田川町は丹後半島の基部にあたり，その基部を南から北に流れる野田川の中流域に位置する。野田川は大江山連峰赤石岳にその源を発し，名勝天の橋立により画された阿蘇海に注ぐ全長16kmにおよぶ河川である。今回調査の下畑遺跡は野田川の支流である岩屋川が加悦谷へ注ぎ込む右岸の山脚に存在する。以前加悦谷高校体育館建設に伴い土器片の出土が認められ，遺跡の存在が推察された。今回新たに加悦谷高校校舎増築が計画され，下畑遺跡の性格をつかむために調査を行うことになった。

調査概要　調査地は体育館のすぐ南に位置し，何らかの遺構が検出されるものと予想されたが，残念ながら遺構を検出するには至らなかった。調査地の大部分は山脚を削平した痕跡を示しており，遺構・遺物は共にみうけられなかった。しかし，調査地南端部には磨滅の進んでいる土師器片を出土する層が認められた。包含層は南方へ傾斜しており，調査地外（グランド方向）に広がるものと推定される。出土遺物は少量の土師器片であったが，ほとんど磨滅しており器種の判明するものは内面のみ黒色にしあげた黒色土器椀の底部が一片のみである。

ま と め　今回の調査では当初の目的であった遺跡の性格は，残念ながら判明させることはできなかった。しかし，周辺に遺跡が存在する可能性は十分考えられる。今後の調査による下畑遺跡の解明が待たれる。

（竹原　一彦）

調 査 地 位 置 図

9. 稚　児　野　遺　跡

所 在 地　天田郡夜久野町字井田小字稚児野

調査期間　昭和56年10月26日～11月30日

調査面積　450㎡

はじめに

稚児野遺跡は，『京都府遺跡地図』によれば弥生時代～平安時代の遺跡として報告されている。このたび当該地に蓄産養豚団地を建設する計画がなされ，京都府農業開発公社から調査依頼があった。以下は，これを受けた調査の略報である。

調査概要

調査地は，稚児野台地のほぼすべてに亘り広大さを極めたが，既に別な開発行為により昭和46年夜久野町教育委員会によって発掘調査されている箇所があり，今回はその成果を加味し発掘地を選定した。すなわち，高所である北部台地に２条，低所である南部台地に９条のトレンチ（４×８ｍ）を設定した。この結果20～40㎝の表土層（旧耕作層）の下は，黄褐色の地山であることが判明した。ただし，丘陵端には黒色土層（遺物包含層）が10～20㎝の厚さで残っており，若干の須恵器を検出し得た。遺構は密集せずまとまりのないピットと，畑作に伴う暗渠排水溝１条等を検出するだけにとどまった。遺物は磨滅した須恵器甕片（奈良～平安時代）と土師質の土錘（同時期か）１点，天目茶碗片（室町時代末期頃）１点が発見された。

調査地位置図（1:50,000）

まとめ

以上のとおり，調査対象地（約2000㎡）のほとんどは江戸時代以降の耕作で遺物包含層が攪乱され，特に昭和31年の開発行為により高所を削り谷地を埋めたてた結果，遺物包含層がまったく削平されたことが判明した。昭和46年の夜久野町教委の調査では，この包含層から奈良時代の須恵器が比

較的多量に発見されており，集落跡の可能性が指摘されている。今回の調査でも牧川に開口する谷の上端から同時期の遺物が出土し，かつて集落が営まれていた可能性を更に指摘できる資料となった。

なお，調査対象外であった国道9号線のトンネル部分の上の台地では，黒色土層が良く残っており，縄文土器片（後期か）が調査中に採集された。同地点では既に中川淳美氏によって打製石斧も採集されており，縄文時代の遺跡が埋没している可能性が強まった。

（伊野　近富）

10. 園　部　城　跡

所 在 地　船井郡園部町小桜97

調査期間　昭和56年7月13日～10月19日

調査面積　900㎡

1. はじめに

園部城跡は園部町市街地南西側の小麦山丘陵一帯をその範囲とする。園部城は江戸時代初期に小出吉親によって築城され，幕末にいたるまで園部藩主小出氏の居城となった。また幕末には天皇の行在所を想定して改修されており，本丸跡に現存する櫓門および巽櫓はこの時に築造されたものという。

現在園部城本丸跡は京都府立園部高校の敷地となっており，今回の調査はその校舎増改築工事にともなうものである。校舎建築予定地2か所について調査を行った。本丸跡は明治時代以後学校用地となっている。そのため今回の調査地も旧校舎の基礎などで攪乱され，また園部城関係の建物の礎石なども削平されて消滅していた。

2. 第1調査地

この調査地では，石組み溝（ＳＤ01）・瓦溜り（ＳＫ02）・古墳時代の溝状遺構（ＳＤ03）などの遺構を検出した。

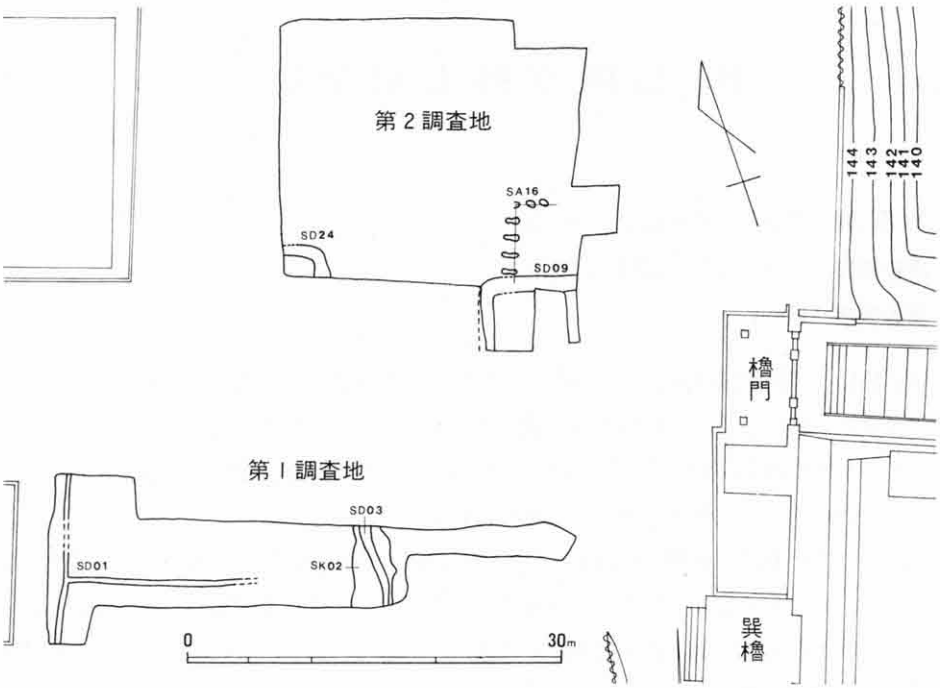
ＳＤ01は調査地西半部にＴ字形にのびる。溝幅約50～20cm・深さ約40～20cmを測る。埋土から江戸時代後期から明治時代にかけての陶磁器片・瓦片が出土した。またこの溝は江戸時代後期の遺物を含む土壙上に構築されている。

ＳＫ02は幅約3.3～2.1m・深さ約60cmを測る。多量の近世瓦片・陶磁器片・土師皿が出土した。ＳＫ02底部から古墳時代の土師器片を出土する溝状遺構ＳＤ03を検出した。幅約1.3m・深さ約20cmを測る。

また，調査地の所々に焼土状の黒色土が推積しており，桐文がヘラ描きされた平瓦片・土師皿などが含まれていた。

3. 第2調査地

この調査地での検出遺構は，本丸御殿の塀跡（ＳＡ16）・5世紀中葉頃の方墳の周溝（ＳＤ09・ＳＤ24）などである。



調　査　地　概　略　図

ＳＡ16の柱穴は，約1.2m間隔でＬ字状に並ぶ。柱穴の底部には礎板状の石が置かれている。柱穴内から近世瓦片を出土するものがあった。古絵図を参照すると，この柱穴群は本丸御殿大玄関から北側へのびる塀跡とするのが妥当であろう。

ＳＤ09は幅1.2m・深さ約40～20cmを測り，断面は逆台形状を呈する。多量の埴輪片が出土した。ＳＤ24は幅約１m・深さ約17cmを測り，断面はゆるいＵ字形を呈する。埴輪片・土師器片が出土した。また，調査地北側で確認した園部城築城の盛土からも多量の埴輪片が出土しており，本丸造成によって古墳が削平されたことがうかがわれる。

4. ま と め

園部城関係の遺構として，まずＳＤ01は，江戸時代後期の土壙上に構築されていること，東方向の延長が幕末築造の巽櫓の北側溝に合致することから，幕末改築時の造作とみられる。ＳＡ16は，古絵図に記された本丸の構造の一端を具体的に示すものといえる。

方墳の周溝出土の埴輪片は，５世紀中葉頃に位置づけられ，これまで園部町内では確認されていなかった古墳時代中期の古墳の存在を裏付けるものといえる。園部町の古代，他地域との関連を考える手がかりとなろう。　　（引原　茂治）

11. 長岡京跡右京第85次

所在地　乙訓郡大山崎町下植野五条田，他

調査期間　昭和56年11月15日～12月9日

調査面積　100㎡

はじめに　長岡京跡は行政上京都市，向日市，長岡京市，大山崎町の三市一町にまたがる広大な都城跡である。桂川はこの京域の東北をかすめ，南東角を貫き淀川と合流する。古くから水運の便が良い一方，氾濫による被害に苦しめられた。淀川の合流点に近い大山崎町では港として「山崎津」はよく知られている。

今回の調査は府道下植野大山崎線拡幅工事に起因する。標高10～11mの低位段丘と前述の桂川の氾濫原との接点であり，この地理的条件でどのような遺跡が存在するか，とりわけ長岡京跡右京九条二坊（西大宮大路）に推定されることから，京域の南限を解明するきわめて重要な調査であった。

調査結果　今回の調査で検出した遺構は竪穴式住居，掘立柱建物，旧水田の暗渠排水溝などであり，その一端を紹介したい。

竪穴式住居は一角を確認したのみで，その一辺は4.5m以上である。残存する深さは0.3m，壁溝は3～5㎝と浅く残る。床面は薄く，部分的ではあるが粘土質の土を貼りつけている。遺物は床面に須恵器杯身，土師器甕など数点出土した。これらは6世紀前半のものである。

掘立柱建物は2棟分検出できた。一つは東西に3間分の柱穴を確認し，径0.5mの円形掘形をもち，柱間寸法は1.2mである。他方の建物は3個の柱穴を確認した。これには12世紀後半～13世紀前半の土師皿，瓦器椀，皿があり，建物廃絶の時期を示す。

長岡京跡右京九条二坊調査位置図（1/50,000）

旧水田の暗渠排水溝は南北に数条検出したが，いづれも真南北方向に走り，平安時代以後のものと思われる。

以上のような調査成果を得られたが，長岡京に係わる遺構が検出できなかったことは残念ではあるけれど，遺存する基盤層も確認できたことによって，今後も調査・研究するうえで注意を要する調査地である。

（竹井　治雄）

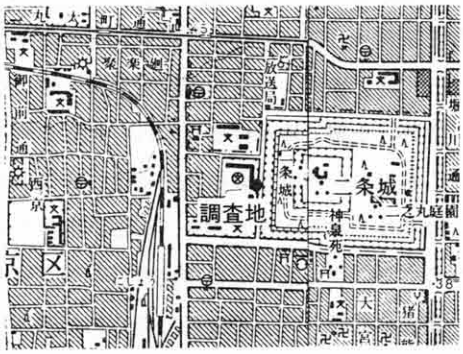
12. 平安宮跡式部省推定地

所在地　京都市中京区西ノ京式部町1，朱雀高校内

調査期間　昭和56年9月21日～10月9日

調査面積　約36㎡

調査概要　今回の調査地は，千本通（平安京朱雀大路）から東へ約240m，美福通に西接する地点で平安宮式部省式部厨にあたる。昭和53年12月～54年3月に同敷地内で京都府教育委員会が実施した平安京跡（二条大路）の発掘調査地[注1]の北西50mの地点である。平安宮南大垣[注2]の碑から北へ25mのところである。調査は，6m×6mのトレンチを設定し，重機による盛土・攪乱層の掘削の後，人力で掘り下げた。盛土・攪乱層は1.8mあり，その下が暗青灰色粘質土，黒褐色粘質土・黄褐色礫層となる。黄褐色礫層は，いわゆる地山面とおもわれるもので遺物は含まない。この礫層は，南東部が高く，北西に向かって下がり，低い部分では砂が堆積している。出土遺物は，平瓦・丸瓦の破片が出土量のほとんどを占める。他に軒平瓦・軒丸瓦・凝灰岩・陶器などがあり，黒褐色土層から出土する。軒平瓦では，五連巴文を内区に配し，巴文の頭が太く，尖り気味に尾に続き，尾の先端が明瞭な圏線をなさず，直角縁のものが多い。胎土は良質で，焼成がよく青灰色を呈するものと，やや軟質で灰白色のものがある。



調査位置図（1/25,000）

今回の調査では，遺構が検出されず瓦類等の遺物が出土したにとどまったが，これは後世に削平されたものとおもわれる。地山面とおもわれる礫層が北に向かって下がっていることに注目したい。

（石尾　政信）

注1　平良泰久他「平安京跡（二条大路）昭和54年度発掘調査概要」京都府教育委員会1980

注2　浪貝毅・玉村登志夫「平安宮東・南限の発掘調査概要」（『平安宮跡』京都市埋蔵文化財年次報告1973-1）

13. 平安京跡左京北辺二坊

所在地　京都市上京区中立売小川東入ル

調査期間　昭和56年9月8日～10月30日

調査面積　約120㎡

はじめに　平安京跡は古代律令国家の最後の都城として794年から20年余を費し造営されたと言われる。今回の調査地は平安京左京北辺二坊に推定され，宮域の東部に隣接するように諸司厨町が配され，当該地はその「左兵衛府町」に属する。

地形と土層　地形は標高45mで北方へ徐々に高まる緩扇状地である。堆積土は基盤層である黄褐色砂礫及び黄褐色粘質土（聚楽土）が地山となる。地山上に堆積する層は1.8mの厚みをもち6層から成る。全て中世から現代までの遺物包含層であり，各々遺構が存在する。その中で近世層は拳大の石を厚く置き，中世では茶褐色粘質土が主体となる。

調査の成果　今回の調査で得られた成果では調査主目的である平安京に係わる遺構，遺物は皆無に等しく，中世末から近世に至る資料が圧倒的に多い。検出した遺構は井戸3基，石室（いしむろ）1基，土壙6基，土壙墓8基，掘立柱々穴12個などがある。

井戸2基は江戸時代後半のもので，掘形径2.2mの円形を呈し，上部は漆喰でかため，下部は内面を揃えた石組である。石室もやはり江戸時代後半に廃絶したもので，規模は基底部では東西3.2m，南北3.4mほぼ正方形を呈し垂直に1mほど立ち上がる花崗岩切石の石組である。落込み遺構はL字状を呈し高低差0.5mを測り斜面は急勾配である。遺物はこの斜面，及び下部に金箔瓦が30点，多量の瓦，土師皿を伴って出土した。金箔瓦の種類は軒丸瓦（梅鉢文，葵文），軒平瓦（唐草文），方形装飾瓦（梅鉢文，桐文）などがある。この遺構の性格は地境や道路，あるいは建物の土壇などが考えられる。

土壙墓は0.5m×0.7m以上，深さ0.4mの方形の掘形を呈し，東西に7基並列して一群をなす。遺物は一土壙墓では土師皿の完形品4点が出土し，14世紀から15世紀のものである。

平安京跡左京北辺二坊調査位置図
(1/50,000)

まとめ　平安京の遺構は発見できなかった。

これは中世，近世において盛土と掘削との繰り返しによるものである。とりわけ「落込み」遺構の掘削はそれ以前の遺構を全て破壊したものであろう。しかし，中・近世の多大な成果もまた「京都」の歴史を知る上で，極めて重要なものであると信ずる。

（竹井　治雄）

14. 黄　金　塚　2　号　墳

所 在 地　京都市伏見区桃山町遠山50

調査期間　昭和56年11月20日～12月4日

調査面積　30㎡

調査概要　今回の調査は，府立桃山養護学校校舎増改築工事に伴うものである。調査地は，標高50mの南東にのびる丘陵上で，現状は竹林である。周辺では，調査地の北50mに黄金塚1号墳（前方後円墳・全壊・推定全長100m），南東に近接して同2号墳（前方後円墳・半壊・推定全長120m）がある。

調査は，等高線に直交するトレンチを3本設定し，掘削した。その結果，地表面から深さ2m前後にわたり竹林の置土があり，その下層に地山層である淡黄灰色砂層・赤褐色粘質土層が認められた。そして，地山面の傾斜は，トレンチ南端で著しく落ち込んでいることが確認された。その落ち込みについては，調査地南東の2号墳の前方部堀割の一部とも思われるが，後世の地形変更も著しいため確証は得られなかった。今回の調査では，出土した埴輪片・須恵器片のいずれも表土（竹林置土）中からで，数も少なく細片であった。埴輪は，円筒埴輪片のほかに器材埴輪の破片も含まれている。

なお，黄金塚2号墳は，昭和49年に調査されており，後円部中央に粘土槨を内部主体とすることが推察される。古墳の年代は，4世紀末から5世紀前葉にあたるかと思われる。[注]

今回の調査では，府立桃山養護学校の村尾清・川上博両教諭の御協力を得た。

（久保田　健士）

調査地位置図

注　戸原純一・笠野殻「巨幡墓の境界線崩壊防止工事の立会調査」（『書陵部紀要』27）1975

15. 羽　戸　山　遺　跡

所 在 地　宇治市菟道小字羽戸山（はどやま）及び同市五ケ庄小字一番割

調査期間　昭和56年7月27日～11月14日

調査面積　約9,000㎡

はじめに　住宅・都市整備公団が計画している宇治団地（仮称）の建設予定地は，宇治市北部の菟道・五ケ庄両地区に広がる約20ha である。五雲峰から西方に伸びる4本の尾根上に，昭和55年の京都府教育委員会の遺跡分布調査によって，古墳や城跡の可能性がある10地点が指摘された。そこで造成工事に先立ち，発掘調査が実施されることになった。

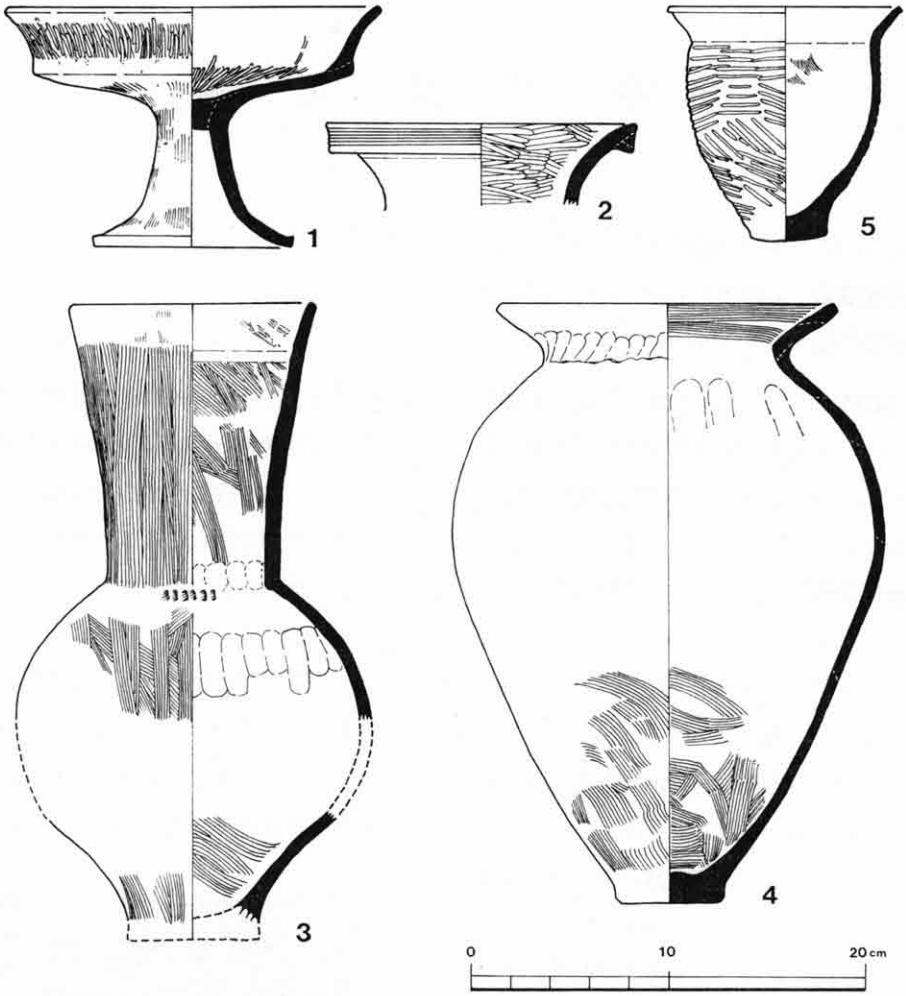
調査の概要　10か所の調査対象地のうち，遺構・遺物が検出されたのは，以下に述べる3か所である。

A地区（約4,000㎡）は，ほぼ方形の洪積世台地で，宇治市内はもとより，乙訓郡から綴喜郡，さらにはるか枚方市まで一望できる極めて見晴らしのよい台地である。台地のふもととの比高差は30～40mである。発掘調査にあたっては，4m四方のグリッドを設定した。地山面は後世の茶畑等によって少なからず攪乱・削平を受けていたが，弥生時代の竪穴式住居跡1基と土壙数基，古墳時代後期の竪穴式住居跡1基，及び近世～近代の数条の溝，それに，調査前に存在が確認されていた石垣上に礎石建物跡1棟が検出された。

B地区（700㎡）は，A・C両地区の谷間に位置する円形の丘陵であるが，当初の予想に反して，古墳を示唆するものは何ら検出されなかった。ところが，円丘の北裾部近くの斜面から突出した東西1.5m・南北1mの方形テラス状の遺構が確認され，6点の弥生式土器がこの上に置かれて（？）あった。

C地区（4,000㎡）は尾根上の台地で，A地区と同様，グリッドを設定して調査を開始したところ，数か所で土壙を検出した。最終的には

第1図　調査地位置図（1/25,000）



第2図　羽戸山遺跡出土弥生式土器実測図
(1・2，A地区SB01，3・4；同SK01，5；B地区SX01)

平坦な頂上部のほぼ全域にトレンチを拡張した結果，土壙は38基を数えた。幅1m・長さ2m・深さ30cmが土壙の平均的な規模である。うち1基からは，A・B両地区出土例とほぼ同時期の弥生式土器片が出土した。

まとめ　羽戸山遺跡のA・B・C各地区を通じて，顕著な遺構は弥生時代のものであり，しかも各遺構出土土器は，いずれも畿内第5様式前半の遺物である。所謂高地性弥生遺跡に新たな一例を加えるとともに，A地区は住居，B地区は祭祀の場，C地区は墓域の可能性があると考えられるとすれば，3地区はひとつのまとまった弥生時代後期の集落形態を示していよう。

(小山　雅人)

16. 内　田　山　古　墳

所 在 地　相楽郡木津町字内田山

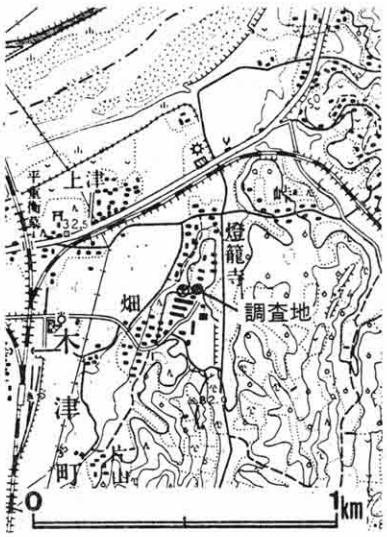
調査期間　昭和56年９月２日～９月28日

調査面積　約300㎡

調査目的　京都府立木津高等学校の校舎増改築工事に伴う事前調査として，当該地に遺構・遺物が存在するかどうかを確認し，記録を作成するとともに重要な遺構が確認された場合には，その保存を計るための資料も合わせて作成することを目的として調査を実施した。

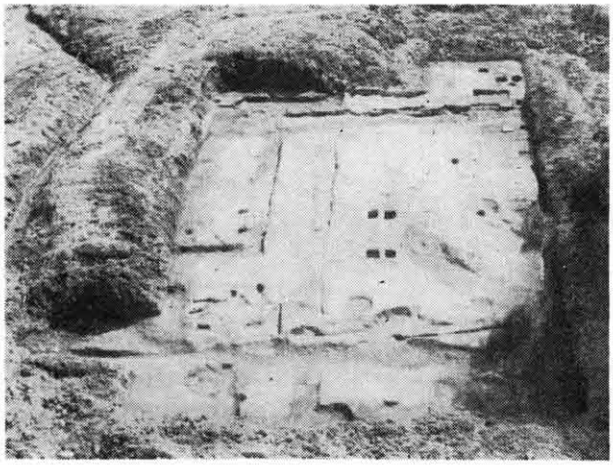
調査の経過と概要　木津町は，北東より流れてきた木津川が北方に大きく向きを変える地点の南岸に位置し，南の那羅坂を境にして大和国と接している。また，大和・伊賀・歌姫の諸街道および木津川に接するこの地域は，古くより交通の要所を占めてきた所でもある。

今回の調査対象となった木津高等学校が所在する内田山周辺は，以前より弥生式土器や埴輪が散布していたことから，注目されてきた場所である。調査は，校舎増改築工事予定地内を４×４ｍを基本とする方眼で区切り，それぞれのグリッドを掘り，顕著な遺構・遺物が検出された場合にはその周辺部を掘りひろげる方法をとった。その結果，地山面以下まで旧校舎の建物基礎，あるいは旧耕作等による攪乱が著しい状況ではあったが，埴輪片を含む溝を検出することができた。この溝は幅約1.6ｍ・深さ0.3ｍを測る浅いものであったにもかかわらず，その中からは上記のとおり多量の埴輪片が出土した。この埴輪および溝の状況・埋土・形態から判断し，自然地形を利用して形成された一辺約12ｍの方墳を区画する周濠であることが判明したが，その主体部はすでに削平されており検出することはできなかった。



第１図　調査地位置図

調査によって出土した遺物は，そのほとんどが周濠内より出土した。主なものとしては，円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪・弥生式土器・土師器

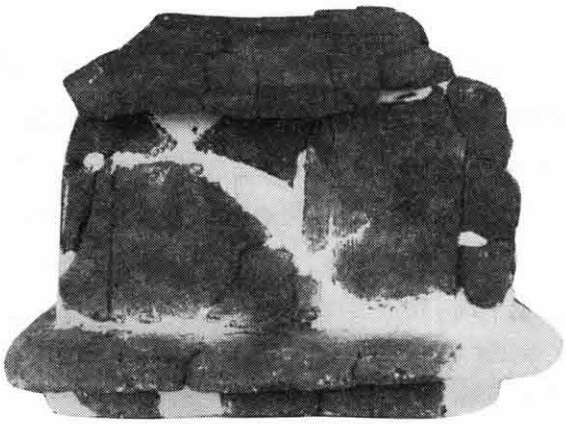


第2図　調　査　地　全　景

・須恵器・土馬等があるが，円筒埴輪がその大半を占める。

まとめ　今回の調査の結果は，以上に略述してきたとおりである。これまで木津高等学校が所在する内田山周辺地域において，かなりの量の埴輪片が採集されていたにもかかわらず，墳丘を有する古墳は確認されていなかった。このことは，今回の調査でも明らかになったように，この内田山周辺は過去の耕作等によって土地がならされ，台地上に存在した相当数の古墳が削平されたのであろう。そして，調査によって確認された周濠も，その一番深い部分のみ遺存していたのである。

いずれにしても，木津の平野を一望できるこの内田山に古墳が存在していたことが明らかになったことは，この地方の古代を知る一つの手がかりができたと言える。また，周濠内より出土した埴輪も南山城地方出土の貴重な資料となるものである。　（大槻　真純）



第3図　周濠内出土の家形埴輪

府下遺跡紹介

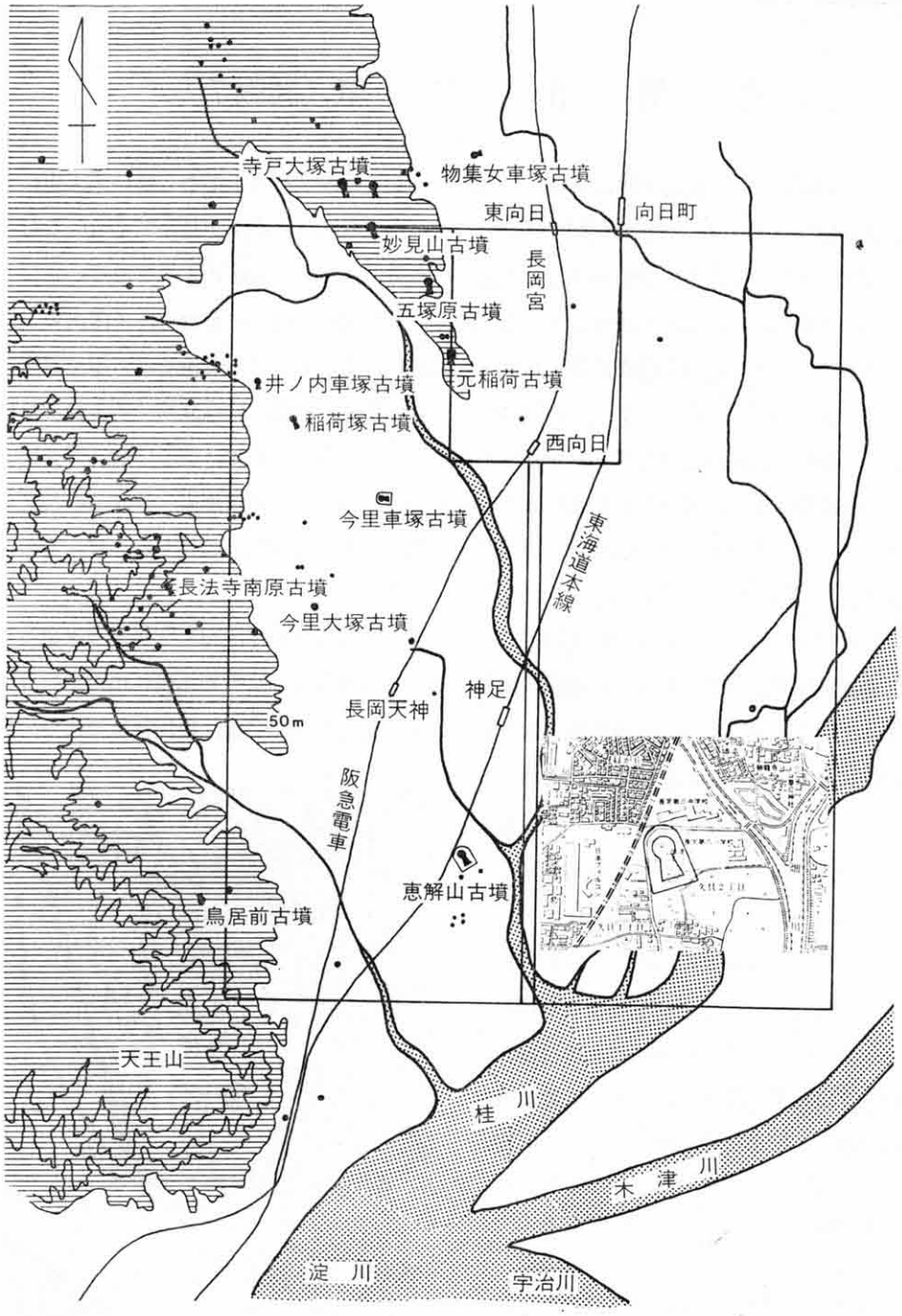
4. 恵　解　山　古　墳〈図版7〉

国鉄京都駅から東海道本線に乗車し，大阪に向かう途中，歴史上でも名高い天王山に列車がさしかかる直前，車窓の左側（東側）に竹やぶで覆われた小山が見えてくる。これが，昭和55年の春に多量の鉄器を出土したことで一躍有名になった恵解山古墳である。

この恵解山古墳の築かれた地点は，乙訓地方でも最南部，桂川，宇治川，木津川の三河川が合流して淀川となる地点に近く，山城盆地の口にあたるところである。古墳を見学する際には，国鉄神足駅で下車し，長岡京市立第8小学校，及び，同市立第3中学校を目指して，小畑川に沿って南下するのが便利である。所要時間としては，徒歩で約20分を要する。古墳の現状は，後円部上が墓地となっている他，後円部側の周濠の一部が公共用グラウンドになっていることを除くと，墳丘及び周濠を含めた全域が，竹林もしくは，水田，畑地として再利用されている。

恵解山古墳についての調査研究は，早くから進められてきたが，昭和50年から実施された周濠部の発掘調査等により，墳丘の規模や外形等に関しては比較的正確に把握されるようになっていた。しかし，古墳の主体となる埋葬施設等については，後円部墳頂に竪穴式石室が存在するらしいということ以外，全く不明といってよい状態であった。ところが，昭和55年の春，長岡京市教育委員会によって行われた発掘調査の成果は，それまで，この古墳に与えられていた位置づけを大きく変化させてしまうものであった。この調査で検出された遺構は，前方部墳頂に埋設された木製の供献品埋納容器と後円部を取り巻く葺石の一部である。その内，木製容器としたものは，幅0.9m，長さ6.5mに及ぶ狭長なもので，内部より，約700点にのぼる鉄製の武器が出土している。武器は，鉄刀，鉄剣，鉄鏃，短剣といった攻撃用のものばかりであり，この古墳の被葬者に対する供献

恵解山古墳位置図



恵解山古墳と周辺の古墳（スケールは，古墳分布図が50,000分の1）

品として，死者を納める棺とは別に埋納されたものらしい。このように多量の武器類を古墳に埋納する例は，全国的にも極めて珍しいものであり，この恵解山古墳の被葬者が占めていた政治的な位置を復原し，山城盆地の古墳時代の様相を解明する上からも，非常に重要な意味を含んでいると言える。

恵解山古墳は，昭和56年の春，国の史跡に指定されており，今後とも更に整備が進む予定である。恵解山古墳の西方にある長岡丘陵上には，京都府下でも有数の古墳群が存在し，又，当古墳の東南方に隣接する水田中では，弥生時代の方形周溝墓が発掘調査によって確認されており，この地方が古代史の中で果たした役割の大きさを改めて認識させる史料がますます増えてきている。恵解山古墳を取り巻く環境は，古墳時代以前の多数の遺跡と共に，その後，この地に造営された長岡京という都城跡を含め，市街化の波の中で，現在，大きくその姿を変えようとしている。そうした中で，今回，恵解山古墳が史跡に指定されたということは喜ばしいことであり，今後，この地域の遺跡保存に対する一つの指標となるよう望まれるところである。　　（久保　哲正）

参 考 文 献

梅原末治「恵解山古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第6冊　京都府　1925
堤圭三郎・高橋美久二「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会　1968
堤圭三郎「京都府内の古墳の概要」『古墳・埋蔵文化財』（財）京都府文化財保護基金　1972
三上貞二「恵解山古墳周濠調査概報」『長岡京市文化財調査報告』第2冊　長岡京市教育委員会　1975
三上貞二「恵解山古墳周濠第二次調査概報」『長岡京市文化財調査報告』第3冊　長岡京市教育委員会　1977
長岡京市教育委員会『掘りおこした郷土史』　1979
山本輝雄「恵解山古墳の発掘調査」『日本歴史』第389号　1980
山本輝雄「長岡京市恵解山古墳の発掘調査」『考古学ジャーナル』184　1980
中山修一「恵解山古墳の被葬者の地位」『長岡京』第19号　長岡京跡発掘調査研究所　1981
久保哲正「恵解山古墳第3次発掘調査概要」『長岡京』第19号　長岡京跡発掘調査研究所　1981
山本輝雄，久保哲正ほか「恵解山古墳第3次発掘調査概要」『長岡京市文化財調査報告』第8冊　長岡京市教育委員会　1981

5. 扇　谷　遺　跡〈図版8〉

日本海を臨む丹後半島は京都府の北端に位置し，その付根の部分は日本三景の一つ天橋立を有し古くから景勝の地として親しまれている。その天橋立より北西へ10数キロ行った峰山盆地に扇谷遺跡がある。

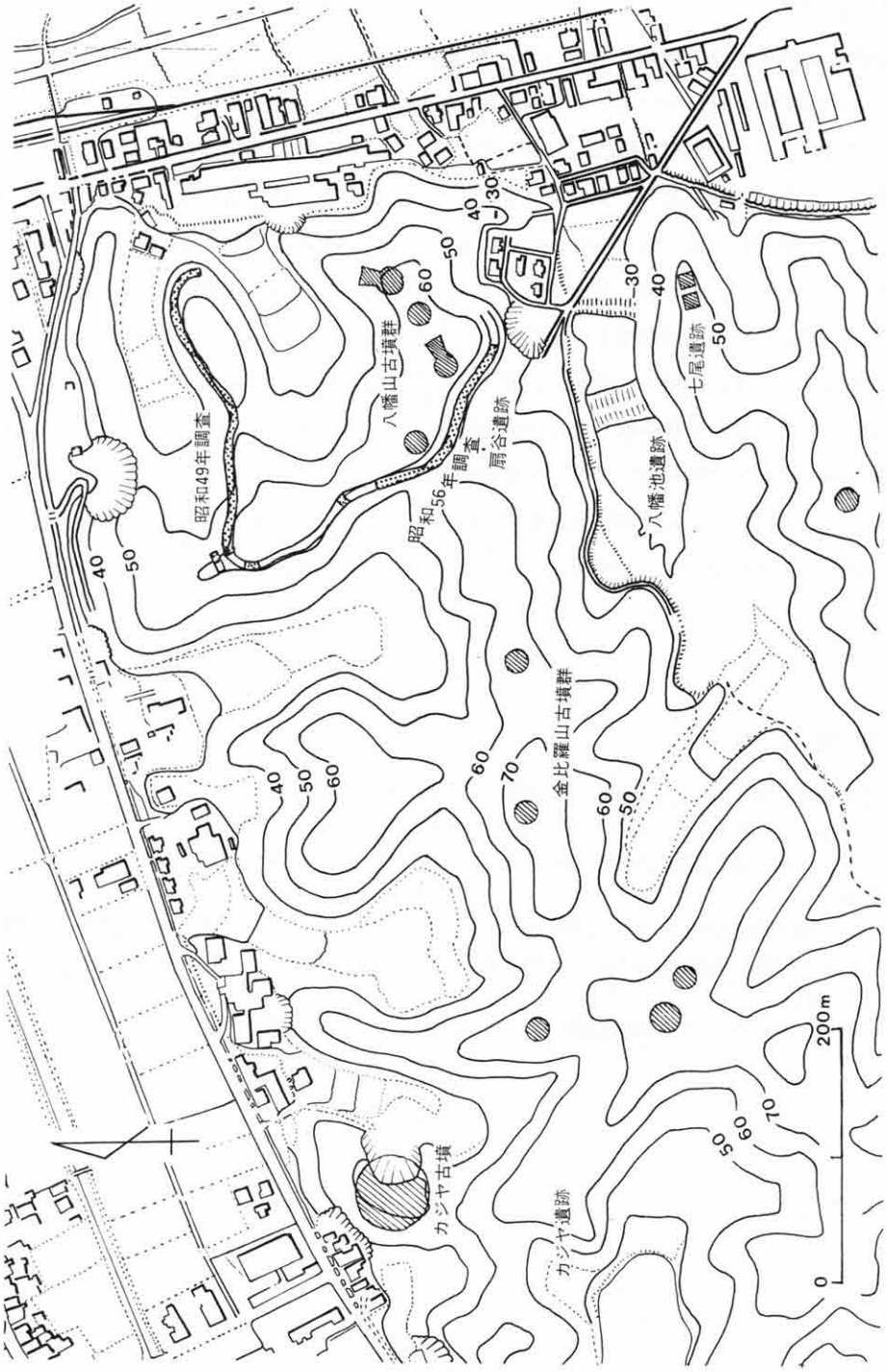
扇谷遺跡位置図

遺跡は京都府中郡峰山町小字扇谷・杉谷・丹波の地区に及び，国鉄宮津線峰山駅から南西へ約200m行ったところにあり，遺跡の範囲は，竹野川の支流鱒留川と小西川に挟まれた東西に延びる丘陵の東端，標高45～50mの間にある。丘陵周辺及び全体が遺跡の密集地で，隣接する遺跡としては，南には八幡山古墳群，八幡池遺跡，そして扇谷遺跡と同様に注目されている，弥生時代前期から中期初頭にかけて築造された方形台状墓を検出した七尾遺跡がある。西には金比羅山・愛宕山両古墳群，そして碧玉製腕飾品，銅鏡，筒形銅器等を出土したカジヤ古墳がある。

竹野川流域は丹後地方において遺跡の密集する地域である。遺跡地図を広げる度に思うことは，竹野川流域を一つの遺跡として大きな枠で囲み，遺跡の個別的な単位として分布図を見てはどうかと考えている。

余談はさておき昨年来，扇谷遺跡は新聞等で大きく報道され全国的に多くの人の知るところとなり注目されている。最初に調査されたのは昭和49年であり，文化会館等の造成工事に伴い調査されている。調査報告書によると，丘陵北側斜面にV字形溝・U字形溝が幅約3m，深さ約2m前後で，全長170mにわたって確認されている。出土遺物は弥生時代前期～中期初頭の限られた時期の土器を，溝中より多量に検出している。特に溝CⅢから出土した遺物には注目すべきものがあった。

それは，陶塤（とうけん）（又は壎（くん））と呼ばれ，土製の笛と考えられているものであり，現在までの報告例は我が国で6例しかない。溝CⅢから畿内第Ⅰ様式新段階に比定される土器と伴出したことは，この陶損の年代を示す上で有力であると考えられる。陶塤は高さ6.7cm，最


昭和49年調査
八幡山古墳群
昭和56年調査
扇谷遺跡
七尾遺跡
八幡池遺跡
金比羅山古墳群
カジヤ古墳
カジヤ遺跡
200m
0

扇谷遺跡周辺地形図

大径5.8cmで吹口の面が平坦な卵形をしており，胴部には径1.5mmの小さな孔が4個あけられている。

昭和52・53年には，開発，防災工事に関連して試掘調査が行われ，溝が丘陵基部に達し，さらに南へと延びていることが確認されている。昭和56年度は第2次調査として，都市計画道路杉谷～荒山線に関連したものであった。昭和49年に検出された遺構は現在では丹後文化会館が建っており，すべては現存していないが，その遺構を含め，56年度に検出された溝とを合わせると約500mが確認された。今回の溝は北に延びる尾根筋で一部が二重溝になっており，西へ続く尾根筋には，幅5m，深さ2.5mの規模の溝が続いている。遺物は，溝より弥生時代前期末～中期初頭の土器が出土している。他には長さ約5cm前後の石鏃数点，玉類，紡錘車，鉄製品，ガラスの小塊など種類が多い。

溝の性格は高地性集落を取り巻く巨大な周濠として考えられ，調査をされた田中光浩氏（京都府文化財保護指導員）は「溝の性格は外部からの侵入を防ぐ目的が想定される」としている。いずれにせよこの巨大な周濠が日本において現存する最古の高地性集落を物語る文化遺産にほかならないものであり，このすばらしい遺跡が保存されてこそ価値あるものとして論議するにふさわしいと考えられる。　（小泉　信吾）

参 考 文 献

小江慶雄「丹後古代文化の原流」『京都学芸大学学報A-11』昭和32年
神尾恵一「京都府竹野川流域（中郡）の弥生遺跡」『同志社考古9』昭和47年
『カジヤ古墳発掘調査報告書』（京都府峰山町文化財調査報告第1集）　峰山町教育委員会　昭和47年
『扇谷遺跡発掘調査報告書』（京都府峰山町文化財調査報告第2集）　峰山町教育委員会 昭和50年
『途中ケ丘遺跡発掘調査報告書』（京都府峰山町文化財調査報告第3集）　峰山町教育委員会　昭和52年
『七尾・扇谷遺跡』（現地説明会資料）　峰山町教育委員会　昭和56年

教育委員会だより

京北町教育委員会

京北町教育委員会では，昭和56年7月20日より京都大学文学部考古学研究室の協力を得て，第3次周山瓦窯跡発掘調査を行ってまいりました。この周山瓦窯跡は，昨年度の調査で窯跡一基の存在が確認され，その周辺にも更に窯跡の存在が確認されました。

これらの窯跡から出土した瓦と須恵器からみて，現在の周山中学校の敷地に存在した周山廃寺へ瓦と須恵器を供給したと推察されます。

今回の発掘調査の目的は，窯跡の範囲確認と窯本体の検出，窯跡出土瓦と周山廃寺出土瓦との比較研究を目的としているだけに，この調査の目的は達成いたしました。

また，京北町では，毎年秋の恒例行事として，町民向けの文化祭を開催しておりますが，本年度も11月15日に，周山小学校にて展示や発表会を開催いたしました。

「あなたも1200年前の瓦に触れてみませんか」と題して，昨年度から今年度にかけて出土した遺物について，町の方々に紹介する展示コーナーも企画し，約200人の方々にお集まりいただき，盛況の内に終了できました。

（京北町教育委員会事務局）

綾部市教育委員会

綾部市教育委員会では，新年早々から「綾部市文化財調査報告第9集」の執筆にとりかかりました。昭和56年度は，4月上旬から11月下旬にかけて，綾中・青野南・青野の3か所の遺跡発掘調査を実施し，貴重な発見をしました。綾中遺跡では円面硯片などの多数の遺物，青野南遺跡は郡衙跡と思われる遺構，また青野遺跡は竪穴式住居跡8基を確認しました。これらの遺物及び遺構写真は，毎年11月に開催される綾部市総合文化祭で展示し，広く市民のみなさんに公開しました。現在，調査報告書の3月下旬発行に向けて，担当職員一同懸命に取り組んでいます。

（綾部市教育委員会）

峰山町教育委員会

峰山町教育委員会では，昭和56年7月から8月にかけて，扇谷・七尾両遺跡の発掘調査を行いました。扇谷遺跡は，標高30～40mの丘陵斜面に確認長500mの濠をめぐらした弥生前期末から中期初頭の集落跡で，濠はさらに延長が見込まれ，防御的な機能を持ってい

ると思われます。七尾遺跡は，扇谷のムラに属する墓域の一部と考えられ，台状墓2基を検出しました。

両遺跡は，新聞やテレビに大きく報道され大きな反響を呼びました。

現在、コンテナーに約60箱の遺物に取り組んでいます。

玉造りを示す石材，大小の紡錘車，近江型土器片，鉄器，ガラスの塊などがあり，西日本，畿内との交流を示すものとして注目していますが，どれを取りあげても大変な課題なので先行きが気になります。

なお，扇谷遺跡は，昭和57年3月，7月に調査を実施する予定です。

（田中光浩＝京都府文化財指導委員）

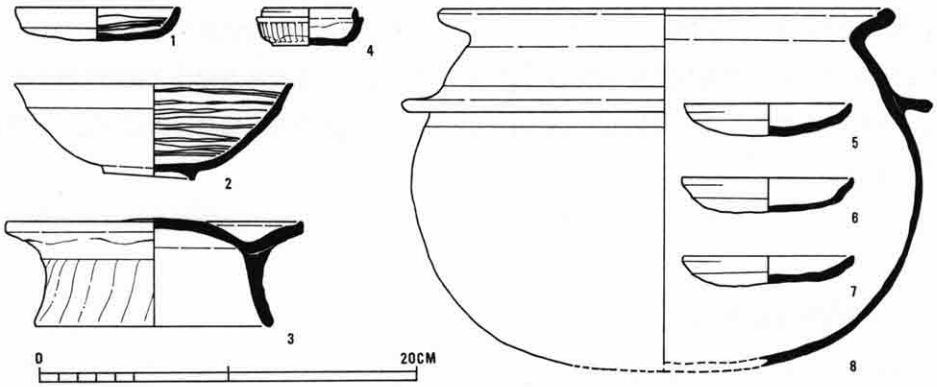
宇治市教育委員会

宇治代官所跡遺跡の発掘調査

宇治代官所跡遺跡発掘調査会（会長依田孝一）では，去る昭和56年9月25日より10月3日まで宇治市宇治妙楽所在の京都銀行宇治支店増築に伴い宇治代官所跡の発掘調査を実施しました。

調査面積10㎡程の小規模なものでしたが，予想をはるかに上廻り，鎌倉時代前期と思われる井戸一基と，多量の土器，木器が出土しました。井戸は人頭大の河原石を用いた円形石組井戸で，内径約1mの規模です。また，その中より土師皿・瓦器碗，羽釜，輸入磁器等が一括投棄された状態で出土しました。

今回の発掘調査により今まで不明確であった中世の宇治の一端が明らかにされたことは



宇治代官所跡遺跡井戸内出土土器瓦器
（皿：1，碗2）土師器（皿：5～7，台付皿3，羽釜：8）
白磁（合子；4）

非常に重要なことでありましたし，今後の宇治市街内の調査の方向付けをしたものとして有意義なものでした。

なお，遺物は現在，宇治市教育委員会で報告に向けて整理中です。

（吉水利明　杉本　宏＝宇治市教育委員会）

京都府教育委員会

府では，昭和45年の府立丹後郷土資料館（宮津市国分）の設置に続き，府内南部地域を対象とした府立山城郷土資料館（仮称）を建設し，２月１日には完工式を催すことができました。

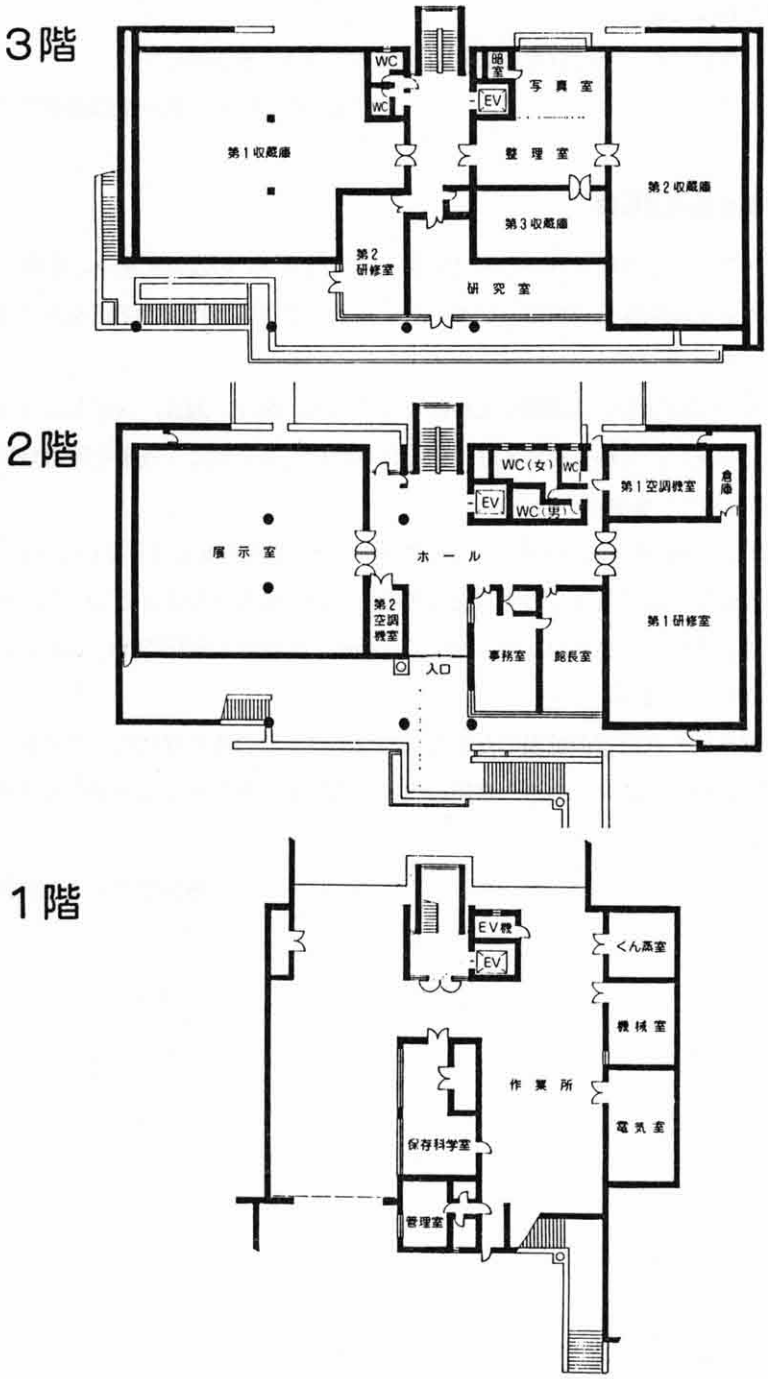
郷土についての歴史的な史料や文化財などを収集，保存，調査，展示しようとするもので，場所は相楽郡山城町上狛にあり，前方に木津川と遠く奈良山丘陵を望む景勝地で国道163号線に面しています。

敷地は24,700㎡と広く，建物も鉄筋３階建で延面積2,970㎡となっています。

建物内部は平面図のとおりです（次頁参照）が，特徴的な施設として木器，鉄器等を科学処理する保存科学室をもつほか，展示室300㎡，研修室２室計230㎡，収蔵室３室計610㎡が整備されています。

現在は展示室や収蔵室の乾燥のため本格的な業務開始は秋以降になりますが，完成後は文化財関係者はもちろん，ひろく府民の方々に御利用いただけるよう準備をすすめているところです。

（磯野浩光＝文化財保護課）



京都府立山城郷土資料館（仮称）平面図

センターの動向

1. できごと（56.11月～57. 2月）

11.17　伏見城跡（京都市伏見区，府立桃山養護学校内）発掘調査開始～12.4

11.27　稚児野遺跡（夜久野町）関係者説明会実施

11.28　稚児野遺跡（夜久野町）発掘調査終了10.27～

12. 3～16　奈良国立文化財研究所主催昭和56年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修「遺物保存科学課程」参加（小泉調査員）

12. 7　前椚古墳（加茂町）発掘調査開始～2.24

12.10　第2回役員会及び第2回理事会開催—於京都パレスサイドホテル会議室—福山敏男理事長，樋口隆康副理事長，岸俊男，藤井学，川上貢，足利健亮，佐原真，原口正三，井上裕雄，東条寿各理事，前尾有人，中村義明各監事出席

12.17　長岡京跡右京87次（大山崎町）発掘調査終了11.18～

12.24　篠・西長尾窯跡群（亀岡市）現地説明会実施，約50名参加

12.26　長岡京跡右京84次（長岡京市，外環状線内）発掘調査終了11.11～

57. 1.9～10　第11回埋蔵文化財研究会—於滋賀県立図書館会議室—出席（原口理事，堤調査課長，久保，長谷川，辻本，大槻，石井，山口，村尾，小泉，石尾，戸原調査員）

1.11　広隆寺跡（京都市右京区）第2次発掘調査開始

1.25　宮ノ平遺跡（城陽市）発掘調査開始

1.26～27　奈良国立文化財研究所主催昭和56年度「条里制研究会」参加（村尾調査員）

1.30　前椚古墳（加茂町）現地説明会実施約120名参加

条里制跡（亀岡市大井町）第2次発掘調査開始

2. 3　長岡京跡左京第83次（長岡京市，向日市，国道171号線内）発掘調査開始

2. 3　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議—於京都堀川会館—出席（栗栖事務局長，白塚総務課長，堤調査課長，安田主事）

2. 5　狐谷横穴群（八幡市）発掘調査開始

2. 8～10　奈良国立文化財研究所主催昭和56年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修「第1回特殊調査技術課程」参加（田中調査員）

2.20　大内城跡（福知山市）現地説明会実施約100名参加

普及啓蒙事業

12. 5　第3回研修会—於当センター資料室—開催（発表者及び題名）長谷川達・小山雅人「宇治市羽戸山遺跡の発掘調

査」水谷寿克・村尾政人「亀岡市千代川遺跡の発掘調査」高橋美久二「古代山崎駅と駅家の構造」松井忠春・増田孝彦「豊富谷丘陵遺跡―狸谷17号墳（No. 101）・18号墳（No. 102）を中心として」参加者71名

12.25　『京都府埋蔵文化財情報』第2号刊行。

1.23　第4回研修会―於京都教育文化センター開催（発表者及び題名）中尾芳治・中谷雅治・林　和広・林　博通　『「中国都城制研究学術友好訪中団」参加報告』参加者72名

お　知　ら　せ

昭和57年度研修会開催予定

回	年　月　日	会　　場
第6回	57. 4.24（土）	京都教育文化センター（市内・京大病院正門前）
第7回	6. 5（土） 6（日）	加悦町公民館
第8回	7.10（土）	京都教育文化センター
第9回	8.21（土） 22（日）	綾部市光明寺
第10回	10.9（土） 10（日）	未定（京都市外）
第11回	12.4（土）	未定（京都市内）
第12回	58. 1.29（土） 30（日）	未定（京都市外）
第13回	3.5（土）	未定（京都市内）

＊日時・会場は変更することがあります。

受領図書一覧（56.11～57.2月）

市川市立市川博物館	図録　法皇塚古墳
長岡京跡発掘調査研究所	長岡京第22号，第23号
福井県立朝倉氏遺跡資料館	一乗谷（朝倉氏遺跡資料館開館記念） 特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡Ⅻ
(財)茨城県教育財団	鹿の子Ｃ遺跡
京都国立博物館	昭和55年度京都国立博物館年報 特別展覧会 禅の美術 目録
久御山町郷土史会	久御山町の今昔
(財)千葉県文化財センター	千葉県文化財センター研究紀要 5，同　6
(財)古代学協会	古代文化 第275号，第276号
大阪経済法科大学考古学研究会	花岡遺跡発掘調査概報，河内大竹遺跡
木津町教育委員会	木津町埋蔵文化財調査報告書 第３集
名古屋市見晴台考古資料館	（企画展）見晴台遺跡の中世を考える
広島県教育委員会	松ケ迫遺跡群発掘調査報告，神辺御領遺跡 石鎚山古墳群，大宮遺跡第４次発掘調査概報 上山手廃寺発掘調査概報，下本谷遺跡第２次発掘調査概報 石鎚権現古墳群発掘調査報告，石鎚権現遺跡群発掘調査報告
蒲郡市郷土資料館	特別展示 三河の銅鐸
大阪郵政考古学会	郵政考古紀要，APXAIA Ⅲ，同Ⅳ，同Ⅴ
向日市教育委員会	向日市埋蔵文化財調査報告書 第７集
福知山市教育委員会	向野西古墳群発掘調査概要報告書（福知山市文化財調査報告書　第４集）
加茂町教育委員会	西椚窯跡（加茂町文化財調査報告 第２集）
宮崎県教育委員会	宮崎県文化財調査報告書 第24集

東北大学文学部考古学研究室	向山（東北大学文学部考古学研究室考古学資料集 第3冊）
神戸市教育委員会	楠・荒田町遺跡発掘調査報告書
日本大学史学会	史叢 第28号
峰山町教育委員会	途中ケ丘遺跡発掘調査概報（Ⅱ）（京都府峰山町文化財調査報告 第6集），下山横穴墓発掘調査報告書（同上　第7集）
加古川市教育委員会	東中遺跡発掘調査報告書
豊岡市教育委員会	但馬・妙楽寺遺跡群（豊岡市立郷土資料館調査報告書 第5集） 鎌田古墳群・下陰古墳群発掘調査報告（同上　第6集） 伝衣笠山のろし台跡発掘調査報告・大森神社古墳発掘調査報告・大師山古墳群分布調査報告（豊岡市文化財調査報告書　第6集・豊岡市立郷土資料館調査報告書 第4集） 宮井条里制遺跡（豊岡市立郷土資料館調査報告書 第7集・豊岡市文化財調査報告書 第7集），北浦古墳群
八鹿町教育委員会	八鹿町の条里 ―八鹿町八木における試掘調査概要― 但馬・米里遺跡（八鹿町文化財調査報告 Ⅲ）
京都女子大学考古学研究会	信濃野辺山原の分布調査，同　Ⅱ
埼玉県立歴史資料館	埼玉県立歴史資料館報 第2号（昭和54年度～昭和55年度）
植田千佳穂	恵下遺跡発掘調査概報
小出義治	小栗山不動院裏山経塚群，桂町遺跡群・なたぎり遺跡発掘調査報告書，シンポジウム盤状坏 ―奈良時代土器の様相―
山口直樹	千葉県文化財センター研究紀要 6
清水真一	鳥取県装飾古墳分布調査概報
斉藤弘道	玉里村舟塚古墳 ―発掘調査のあらまし―
山田　治	瑞穂陸上競技場内 大曲輪遺跡発掘調査概要報告書
大山真充	がんど遺跡・塩浜遺跡　＜瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（Ⅲ）＞，尾ノ背寺跡発掘調査概要（Ⅰ），昼寝城跡発掘調査概要
瀬戸谷　晧	城崎町上山スクモ塚1号墳，永徳遺跡，養父町市夜ケ谷遺跡（養父町文化財シリーズ 9），よみがえる古代の但馬
荻野繁春	上長佐古窯跡群発掘調査報告書（福井県陶芸館調査報告 第2集）
北山　惇	播磨・竜山5号墳発掘調査報告（高砂市文化財調査報告 6）
中村信幸	海老池第1号窯，石浜古窯跡群(1)，石浜古窯跡群(2)

――編 集 後 記――

この4月1日で，当センターも発足して満1年になります。そして，本誌『京都府埋蔵文化財情報』も第3号まで刊行することができました。号を重ねるごとに充実してきているとは思いますが，まだまだ未熟な点等，多々あることと思います。本誌は，年4回のペースで刊行していく予定ですが，今後とも皆様方からの御批判，御指導をよろしくお願い致します。

（編集担当＝田中　彰）

京都府埋蔵文化財情報 第3号

昭和57年3月31日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル中御霊町424番地
TEL (075)256-0416

印刷　中西印刷株式会社
代表者　中西　亨
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）